
狭い世界で、君は憶えていない

ostrich

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狭い世界で、君は憶えていない

【Nコード】

N2277S

【作者名】

ostrich

【あらすじ】

ここよりずっと狭い別の世界でのお話。

主人公のシルリーは二ーロの市庁に勤める「歴史家」の少年です。有能だけど無愛想な市長フォードが辞任し、次に市長になったのは、なんとまだ十六歳の少女ミルでした。そんな彼女をサポートしていくシルリー。深まる南北の対立。軍部のクーデター。全ての人間が一定期間の記憶を失う大晦日の夜。

はたして二ーロの街は、誰も悲しまないハッピーエンドを迎えられるのでしょうか。

第一話 「歴史家」

二丁口の街は春の陽光を浴びて午後のひとときを迎えていた。窓をいっぱいにとった市庁舎の中も温まっているだろう。市庁舎前の広場では若草が萌え、噴水がきらきらと眩しい光を映していた。

シルリー・コランデューはいわゆる正装でベンチに腰掛けていた。白い襟付きのシャツに、褐色の上着を着て、その上に丈の短いマントを羽織っている。勤務時間でない今、もう少し楽な格好をしても許されるのだが、それをしないところにこの少年の生真面目さと自らの職への誇りが伺える。とはいえシルリーも今は大分気を抜いているようで、背もたれに体を預け、噴水をぼうつと見つめていた。

「シルリー」

声を発したのは、これもまたシルリーと同じくらいの年代の少年だった。濃紺の学生服に身を包んでいるが、大分着崩している。ブロンドの髪はシルリーの黒髪と対照的だった。

「サン」

シルリーは相手の少年の名を呼ぶと立ち上がった。

二人は世間で言うところの幼馴染という間柄で、お互いに身分が変わってしまった今でも交流が続いている。そう、随分と変わってしまったものだった。シルリーは市庁に務める公務員で、サンは大学で学ぶ身。普通はシルリーも学生であるべき歳なのだが、彼は家が特別だった。

コランデューは代々歴史家を輩出する家である。歴史家といっても歴史を研究したり記したりするばかりではない。万能の学者とも言うべき彼らは世の様々なものに造詣が深く、この街の長い歴史の中で市長の補佐という政治的な役割まで任されるに至った。歴史家は一つの時代に一人しかおらず、代々世襲である。シルリーの父がシルリーという子をもうけたのはかなり歳をとってからのことで、

よってシルリーが若いうちに引退してしまった。そのときシルリーは十五歳で、さすがに戸惑うこともあったが、それから三年経った今ではすっかりこの仕事に慣れてきた。

市庁舎と大学は近く、昼休みの時間帯も被っているので、二人はこうして昼食を共にすることが出来るわけだ。二人は行きつけの喫茶店に向かった。

その通りはレンガで舗装されていて、緩やかな傾斜を帯びている。道の中央には花壇が設けられており、両端には主に飲食店があった。そんな店の中のひとつ、そのテラスに設けられたテーブルをシルリーたちは囲った。シルリーはコーヒーを、サンはミルクを片手に談笑していた。極めて穏やかな雰囲気の中、あるときシルリーが発した一言は極めて浮き立って聞こえた。

「最近、記憶を失くしているように感じるんだ」

サンはきょとんとした顔をしている。シルリーの身にそんな変化があつたのなら、まず自分が真つ先に気付くはずだろうとでも言いたいのだろう。それに、そういった話は少々突飛に思えた。

「俺だつて、これといった違和感を覚えているわけじゃないんだけど、『歴史』の草稿を読み返したら訳の分からん記述があつたんだよ。自分で書いた覚えのない」

「歴史」とはシルリーが歴史家として世の中の出来事を記している書物だ。歴史家は毎日の出来事を日記のように書き起こし、後にそれをまとめて「歴史」とする。それもシルリーの仕事のひとつだった。

「それは確かに妙だな。誰かのイタズラとかじゃなく？」

サンも顔をしかめた。

「あれは確かに俺の字だつた。記述は一年分くらいあつた。それも恐ろしく具体的だ。それを説明するには、俺がその一年の記憶を失っていると考えるのが一番考えやすいんだけど」

話題には出したものの、それに対する有益な考察や回答が得られた訳でもなく、二人はそれぞれの居場所に戻った。

シルリーは一日の務めを終え、自宅に向かう途中、ずっとそのことを考えていた。単純に仕事として困るのだ。自分でも得体の知れない記述があるというのは。それがいつの話なのか、あるいはありもしない物語なのか、はつきりさせなければならぬ。

とはいえ他の仕事もあるので、その記述を全部細かく読んだわけではなかった。幸い今日は帰宅してから時間がある。最初の部分から丁寧に読み進めていこうと思っていた。

シルリーの家は市庁舎の近く、住宅街の入口にあった。それは一人で住むには広すぎるように思える、三階建ての棟だった。非常に古い建物で、外からは土を固めて造られているように見えた。もちろん中は工事を重ね、現代に相応しく造りかえられているが。生活に使われるのは一階のみで、二階、三階は書庫のようなものだった。それらの階には歴代の歴史家が記した書物が収められている。また隣には、さらに古い書物を保存するための四階建ての塔がある。

シルリーは荷物を一階に置くと、直ちに二階へと向かった。「歴史」の著述など、自宅での仕事はだいたいここで行う。階段は暗く冷え冷えとしていて、硬質な足音が響いた。二階もまた暗かったが、近頃は便利になったもので、電気を使うことによって夜も文字を読むことが出来る。シルリーが明かりをつけると、三列に並んだ本棚と、作業用のテーブルが浮かび上がった。シルリーは椅子に掛けると、テーブルの上の本を開いた。例の記述がある本である。その最初のページをめくり、物語を読むような心持で文字をたどる。不思議なことに、その文章を読んで湧いてくるイメージは異常なほどに鮮明だった。想像ではなく、実際に体験したことのように。

記述は、シルリー自身が市庁舎前の広場でオルガンを奏でているところから始まっていた。

広場は賑わっていた。子どもたちの声と、足踏みオルガンの音。それに乗せた伸びやかな歌い声。

この街の暦で言うところの、五九二年、一月一日。元旦の午後だ。

大晦日の夜から元旦にかけて行われる新年祭も終わり、市庁舎の周りはいつもの静寂を取り戻しつつあった。それにも関わらず、広場の一角は一層の盛り上がりを見せている。

嬉しいな　嬉しいな

君が友達で

良かった　良かった

君と出会えて

感謝しよう　感謝しよう

世界を狭くしてくれた神様に

そんな歌を弾き語っているのはシルリー「コランデュー」。街に一人しかいない、歴史家だ。歌っているのは、この街の人間なら誰でも聴いたことのある童謡。

「この歌は皆知っているな？」

シルリーの呼びかけに、皆「しってる」と口々に言う。

「じゃあ、この歌がどういう意味か、分かる人はいるか？」

そう言う途端に場は静かになった。その様子を見たシルリーは愉快そうに笑った。

「そうだな。今日はその話をしようと思って来たんだ。実はこの歌、この二ー口の街の始まりの話と深く関係があるんだ」

シルリーはオルガンの下から紙芝居の一式を取り出した。最初の一枚には「せかいのはじまりのおはなし」という題と暗闇に浮かぶ青い球体が描いてあった。子どもたちからは「なにそれ」という声が聞こえてくる。

「これはね、『星』だ。とっても大きいボールみたいなものさ。この上には、二ー口みたいな街が、何百個も、何千個も、いやもっともつとあるんだ」

子どもたちは想像できないというような顔をしている。二ー口の街が彼らにとっての全てなのに、それと同じようなものが何千個も

あるというのだ。彼らが幼い子どもでなくても理解に苦しむ話だろう。

シルリーは皆の反応を見て微笑むと、紙芝居を始めた。

昔々、二ー口の街はもつともつと大きい世界の一部でした。それは「星」といって、大きいボールのようなもので、その上にもものすごくたくさん人間が暮らしていたのです。海の向こうにはまた別の街があつて、わたしたちとは違う肌の色をして、違う言葉を話す人たちが住んでいました。でも、この世界を創った神様は悲しんでおられました。人々は、いつも喧嘩ばかりしていたのです。それに、「星」には人が多すぎて、互いに一生出逢うことの出来ない人たちがたくさんいたのです。そこで神様は、皆が同じ言葉を喋れば仲間はずれもないし、世界がもつと狭ければ人と人はもつと出逢いやすくなるだろうと思いました。そこで、ひとつの街を「星」から切り取ったのです。それが二ー口の始まりでした。

「その結果、どうなったのでしょうか」

シルリーは紙芝居を止めた。子どもたちの顔を眺める。皆頭に疑問符が浮かんでいる様子。

「まあ、分からんよな。俺たちはそれを歴史と呼ぶんだけど」

それから一時間ほど経って、シルリーは市庁舎の廊下を歩いていた。もう昼休みは終わり、今は勤務時間だ。限りなく静かで、天井の高いここでは靴音が何重にも響く。窓は壁いっぱいにとられており、昼間は柔らかな陽が差した。

シルリーはふと、前方から歩いてくる男に気が付いた。年齢は四十代半ばくらいで、痩せていて背が高い。漆黒の髪は少し長く、顔には厳しげな表情が刻まれている。服装はシルリーのそれと似ているが、若干豪奢に見えた。シルリーは男と目が合うや否や、会釈をした。

男はフォードⅡダングルⅡテクマといった。この世界、二ー口の

街を治める者、つまり市長である。シルリーのもっとも身近な仕事相手でもあった。

「広場でやっていたあれは何だ」

フォードは尋ねた。引き締まった、強い意志を感じさせるような声だった。もっともこの場面が緊迫しているわけでもなく、フォードという男は常にこんな調子なのだ。

「学問の入口ですよ。ニーロには学びたくても学べない子どもが残念ながらいます。つまり青空教室です。まあこれは歴史家コランデューとは関係なく、自分が勝手に始めたことです」

シルリーが応えると、フォードは「そうか」とだけ言ってシルリーとすれ違った。シルリーも遅れて歩き始めた。

「ああ、シルリー。後で市長室に来い」

二人の距離が大分出来たところでフォードは振り返らずに言った。シルリーは振り返って返事をした。

後で来い、というのは、別に今フォードに他の用事があるという訳ではない。目上の人間が他人を呼びつけるときの市庁舎の古くからあるマナーだ。もっとも何故そうしなければならないのかは誰も知らないし、考えても意味のあることではないように思えた。市庁舎にはこういった形骸化したマナーがいくつかある。

シルリーは少し時間をおいてから市長室を訪ねた。部屋の前に備えてある鈴を鳴らし、返事が来てからドアを開ける。

市長室は一般の家にある書斎のような内装だった。窓はなく、電氣を使った照明が備えられている。

フォードは古びた本を読みながら椅子に掛けていた。表紙には「ピエロの旅」と書いてある。ニーロでは有名な童話だった。故郷で迫害を受けた一人のピエロが様々な場所を旅する冒険物語だ。

「童話ですか」

「最近、童話が書かれた背景というのを調べていてな。そういうのはお前たち歴史家の得意とするところだろうが……。この話のピエロも、当時の迫害を受けていた身分を指しているらしい。そして、

最終的にピエロの永住の地となる街の主が登場する場面。これは作者が望んだ、しかしその時代にはいなかった統治者の姿なのだろう。本文では『王』という言葉を用いているが……。世界の分化以前の文学だからな」

「二ーロの起源、もつと巨大な世界から分化したという話について、市長は信じておられるのですか」

「あれが事実でなければ、この本にあるような、いくつもの街が存在する描写が様々な書物に見られることの説明がつかない。個人の空想にしては壮大すぎる。それに、コランデューの公式見解なのだろう？ 『期間』同様」

「ええ」

そのやりとりが終わると、フォードは立ち上がり本を椅子の上に置いた。

「さて、本題だ。わたしの辞職の件はお前も知つての通りだ。次の市長はもう指名してある。市長といえは歴史家のパートナーといつていい存在だろう。お互いをよく知っているに越したことはない。だから、お前と次期市長の面会の場を設けた。急ですまないが、今日だ。三時にセレモニーホールに」

急な話ではあるが、歴史家の仕事は常に市長についてする為、市長の指示ならば問題がなかった。

午後三時前。シルリーは言われた通りセレモニーホールの門の前に立っていた。

ホールは非常に天井が高く、教会のようないでたちをしていた。荘厳な装飾の施された分厚い門の向こうには、式の出席者の為の席が数百設けられ、壇上にはパイプオルガンが備え付けられており、ホールの横には巨大な鐘があつた。

「指定の時刻よりは少し早いですが、お入りください」

シルリーの背後から声がした。振り返ると老いた男が片手に鍵を持って立っていた。男が扉に鍵を差し込み回すと、ゴトンという音がした。そのまま男は扉を開ける。シルリーは礼をしてホールの中

に入った。

市庁舎という建物自体、基本的に窓の多い開放的な設計をしているが、特にこのセレモニーホールは壁がほとんどガラス張りだった。陽が差し込んで温まりそうなものだが、暖炉などの暖房設備がないので空気はまだ冷えていた。

シルリーは天井のシャンデリアや、ところどころに置かれた天使の彫像などを眺めながら新市長を待つことにした。

市長交代に際して、シルリーの中では期待と不安が同居していた。フォードはダンゲルは優秀な政治家だとシルリーは評価していた。しかし、人間として相性が合ったかという点、そうでもない。そもそも親子ほど歳が離れているのだ。どうしてもある種のやり辛さは否めないし、フォードの性格もそれに拍車をかけた。意地が悪いとかそういうことではないのだが、何事においても事務的すぎるように思われた。先ほどの童話のような余談が出てくることは実は本当に珍しく、普段は本当に手続きのような会話しかない。もちろん仕事に妙な私情を持ちこまれても困るが、さすがにこれでは息が詰まった。そういった意味で、シルリーは新しい市長に若干の期待を寄せていた。二丁の市長は先代からの指名で選ばれる。フォードの選ぶ人間だから人間性も彼に似るのかもしれないが、彼より若いのは確かだ。それだけでも随分と楽になった。しかしどんな人間が来るか分からないという不安もある。繰り返すが、フォードは政治家としては非常に優秀だった。もっとも、ここ最近はいまいち采配が冴えないといった声もあり、シルリーも若干それは感じているのだが。

ふと懐中時計を確認すると、ちょうど三時だった。そう思った瞬間、背後で扉の開く重い音がした。シルリーは直ちに振り返った。新市長はかつかつと足音を響かせシルリーの前まで寄った。シルリーも歩き距離を縮めた。シルリーは深々と頭を下げる。

「お初にお目にかかります。市庁に歴史家として勤めております、シルリー。コランデューと申します」

シルリーが顔を上げると、新市長は微笑んだ。

「初めまして。ミル・リラと申します。あなたのことは先代のフォード・ダングル様からよく聞いています」

その言葉を聞いている間にも、シルリーはあからさまに驚きが見取れる表情をしていた。

新市長の栗色の髪は長く、肩までかかっており、繊細な指先は純白のグローブに、その全身は緑色の絹のドレスに包まれている。顔は薄く桜色を塗ったようで、まだ幼さを残している。そう、少女なのだ。自分よりもいくらか年下の。

その様子を察したのか、ミルは口元に手を当てて笑った。

「驚きますよね。ええ、十六です、まだ。でも、あなたもそう変わりはないでしょう」

確かに、シルリーも市庁勤めの人間としては異例の若さで、まだ十八だ。しかし、歴史家のシルリーであっても十六歳の人間が市長になったなどという話は聞いたことがなかった。いくら身分に関係のない指名制とはいえ。

「せっかく設けられた場ですから、少しお話ししましょうか」

そうミルは言って、席のひとつに腰掛けた。

冬のある日。日差しだけが優しく、ガラスをさらさらと通り抜けてくる、穏やかな午後だった。

第二話 「市長」

セレモニーホールは音楽の演奏をする場という役割も持っているため、声が良く響く。

「落ち着きませんね」

ミルはやりにくそうに笑った。そもそも二人の為にだけにセレモニーホールを使用するというのがまず大げさな話だ。この時間帯、市庁舎の施設で他に開いているところがなかったというのが、ここが面会の場所として選ばれた理由なのだろうが。

シルリーはミルのことをまじまじと見つめた。出来過ぎている。

そう思った。シルリーは大学やその他の教育機関で富裕層の子相手に講義をすることがある。育ちのいい子どもは見慣れているつもりだ。それでもこのミルほど礼節を弁え、気品のある少女は見たことがなかった。まるで、まさにこの街の長となるために育てられてきたかのように、彼女の振る舞いは完璧だった。

「失礼ですが、現市長とはどのような関係で？」

シルリーがまず知りたいのはそこだった。もつとえば、何故自分の歳にも満たない小娘が次期市長に選ばれたのか、ということ。彼女を指名したのはあのフォード・ダングルだ。実力第一主義の彼が、たとえどれほどの金を積まれようとも、どれほど親密な間柄の者でも、能力のない者を選ぶはずがないのだ。

「父は市庁舎勤めの人間でした。フォード様には家族共々、懇意にして頂いています」

台本を読むかのようにミルはすらすらと返答した。その答えは当然シルリーの疑問を十分に晴らすものではなかった。

「シルリー」

「はい」

「やはり、場所を変えたいですね。もう少し落ち着ける場所に。市庁舎では話せないようなこともたくさんあるわけですし」

「確かに仰る通りです」

「ですから、急で申し訳ないのですが、明後日の夜、七時に市庁舎前の広場に来て下さいませんか。あなたとは、もう少し色々なことをお話ししたいし、訊きたいこともあるので」

その申し出に、さすがにシルリーも面食らった。しかしミルはまだ市長就任した訳ではないので世間に顔は知れていない。二人で外を歩いていたところで問題は生じないだろう。そんなことを冷静に考え、シルリーとしてももう少し次期の市長とは話しておきたかった。その時刻に会う約束をした。

面会を終え、シルリーは市長室へと向かった。

「ただいま戻りました」

フォードは何やら文書を作成しているらしかった。時期を考えると報告書か引き継ぎだろうか。

「市長、どういことですか」

フォードが筆を止め、シルリーの方に向き直った。

「あなたが十六の少女を次期市長に任命したなどと、信じたくありません」

シルリーの言葉を聞くと、フォードはすぐに再び筆を執った。視線はシルリーに向けずに応える。

「シルリー＝コランデューよ。わたしは、お前が思っている通りの人間だ。それは今でも変わらない」

言葉のまま取るのなら、フォードはミル＝リラの能力を買って彼女を選んだということだろうか。確かに年齢では測れない実力を彼女が持っているという可能性は否定できない。シルリー自身、先ほども、あの立ち振る舞いは年齢不相応だとは感じた。

結局それ以上の会話はせずにシルリーは市長室を出た。

何事もなく二日が過ぎ、シルリーは勤めを終えて市庁舎を出るところだった。普段ならばこのまま自宅へ向かうところだが、今日はミルとの約束がある。現在の時刻は六時四十五分。広場に行くのに五分もかからない。シルリーは周りの風景を見回しながら歩いてい

った。

夜でもこの広場は街灯のお陰で随分明るい。この広場を含む現在の市庁舎が完成したのは数百年前のことで、芸術が盛んな時代だったという。なるほど、確かにこの広場の外観にも洗練された様式美を見出すことが出来る。このある種ロマンティックな雰囲気を求めて広場を訪れる若者の姿がこの時間でも大分見られる。

シルリーは噴水前のベンチに座って待つことにした。少し顎を上げると天空に散らばる星と、その中で一際明るく輝く満月が見える。天体の運行をも研究対象としてきたコランデューの人間は、星座の配置を見て季節を感じる。

しばらくぼうつとしていたが、噴水が止まるのを見て七時だと分かった。それとほぼ同時に、遠くから声がした。シルリーは直ちに立ち上がって、相手の方に歩み寄った。

「あ、座ってていいですよ。わたしも座りたかったんで」

ミル「リラはそう言ってシルリーに座るのを促し、自分もベンチに腰掛けた。シルリーは座りながら、一昨日とは違った視線でミルを見ていた。

「何というか、かなり雰囲気違いますね。一昨日とは」

まず服装からして違った。先日ミルが着ていたのは儀式の場でしか用いられないようなものだから当然といえば当然なのだが。今のミルの服装はどちらかといえば北部の庶民の一般的な服装。シルリーはフオードとプライベートで会うこともあったが、そのときも彼は富裕層らしい服装をしていた。加えて、今のミルは言葉遣いも若干柔らかくなった気がした。

「市庁舎の中とは違いますよ」

ミルはそう言うてはにかんだ。シルリーはミルにようやく少女らしいところを見出したような気がした。

「今日は急に呼び出してしまつてごめんなさい。訊きたいことは色々あるんです。まず、恥ずかしながら、歴史家のことをよく分かつていなくて」

まあ当然だろうとシルリーは思った。二丁口の市民で歴史家の仕事を正確に把握している者は極めて少ない。というのも、その扱う対象が幅広すぎるからだ。実際、歴史家は何をするのか、と訊かれて、シルリー自身簡潔には答えられない。

「そうですね……。一言でお伝えするのはなかなか難しいのですが、基本的にはあなたの描く歴史家像と同じと考えて頂いて構いません。日々の歴史を記録し、書物として書き残す。あとは、市長の秘書のような仕事もします。それと学者でもあるので、学会に出たり、大学で実際に講義をしたりもしますね。ああ、そうだ。これは知らない方も多いのですが、『歴史』は市庁から独立した機関の一つでして、自分直属の部下もいます。まあ、あなたにとっては、サポート役、便利屋のような存在になるでしょうか」

「なるほど」

ミルは熱心に聞いているようだった。

「……何でこんな私的な場で会うことを望んだかというと、やっぱり不安なんです」

ミルは首を傾けて苦笑した。

「わたしは、上手くやれるでしょうか。わたしに能力があるかどうかはやってみなければ分からないけれど、ある程度世間の人がわたしの年齢に不安を抱くのは仕方がないことです」

シルリーの懸念も、その点が一番大きかった。仮にいくら優秀な人間であっても、世論を味方につけられなければ上手くやっていくのは厳しい。十六歳の子どもが市長に就任したなどという話は、暴動にも発展しかねないほどのものだとしてシルリー自身思っていた。

「だから、シルリー。わたしを支えてくれますか。わたしに、色々なことを教えてくれますか」

不安げにシルリーに縋るミルの表情からは、先日の落ち着きは完全に消え失せていた。そんなミルを見て、シルリーは心のどこかである意味安心していた。

「もちろん。それが歴史家の仕事ですから」

「よかった」

ミルは再び笑顔を取り戻した。シルリーも微笑み返した。

「次の話、いいですか」

ミルはそう言いながら、天上を指さした。シルリーがそれを目で追うと、煌々と輝く月があった。

「『期間』って、知っていますよね」

その言葉に、シルリーはこれまでの穏やかな表情を崩した。声も真剣さを帯びたものに変わった。

「ええ。市長から聞いたのですか」

「そうです。数百年に一度の周期で、人々のある期間の記憶が失われることがある。それが『期間』についての認識で正しいでしょうか。どうやら、フォード様はその研究を独自に進めておられたそうで」

シルリーは眉をひそめた。『期間』についての説明はミルの言ったとおりだった。世間的には都市伝説、オカルトの類としてあまり信じられてはいない。しかし、天体の運行、暦、そして歴史を研究してきたコランデューの見解としては、『期間』は実在することになっている。そして、そのような現象を研究するのは本来歴史家の役目なのだ。

「どうもあの方は、独自研究がお好きなようだ」

これはシルリーにとっても噂に過ぎないような話なのだが、フォードはあらゆる方面において自分直属の機関を設けているらしい。

主には医療、軍事、農業、天文学などの。

「そして、フォード様の研究に寄れば、『期間』はもう始まっていると」

シルリーは黙ってしまった。確かに、周期的にはそうであってもおかしくないのだ。しかし自分でも求められないような『期間』の開始時期をフォードの研究室が導けたという話には若干の疑問が残った。

「わたしはそういった方面に無知なので、フォード様の言うことが

正しいのか分かりません。ただ、それが本当だとしたら、わたしが市長であつたということは、誰の記憶にも残らないのでしょうか」

ミルは立ち上がってシルリーに背を向けた。

「だからこそ、頑張りますよ」

そう言うミルを、シルリーは随分と頼もしく感じた。もしかしたら自分がすること全てが人々の記憶に残らないかも知れないのに、そういう言葉が出てくるとは、並の気概ではない。

「あなたを呼んだ二つ目の理由が、これでした。今何かできるわけではないかもしれないけれど、歴史家であるあなたに、フォード様が言っていることを知っておいてほしかった」

そう言うミルは振り返った。確かに、フォードがそのようなことを考えているというのは知っておいて損はなかった。ただ、知ったからといってどうという話でもない。シルリーは、今の会話を取りたてて記憶には残さなかった。

「そして、これが最後の理由……なのですが……」

言いながら、次第にミルは俯いていった。

「暇じゃないならいいんです。わたしを……街へ連れていってくれないませんか」

「え？」

これにはシルリーも目を丸くした。

「これからの仕事のパートナーとして、あなたとはもう少しお話がしたい。で、そのついでに、街を回って駄目ですか。わたしは今まで、あまり外の世界に出されずに育ってきました。そうして、もうすぐ市長就任を迎えます。だから、自由に街を回れるのなんて、これが最初で最後なんです。そして、これから仕事を共にするあなただから、一緒にいてほしいと思うんです」

ミルの理屈は分かるような気もしたし、分からないような気もした。だが、まだ十六の少女が市長就任というあまりに壮大な出来事を目の前にしてどれだけ不安かということは想像がつく。その右腕たる歴史家をどれほど頼りにせざるを得ないかということも分かる。

「では、商店街に行きましようか」

シルリーは立ち上がった。ミルの顔がだんだんと明るくなるのが分かった。

「はい」

商店街は二丁口の北部の四分の一を占める。商店街といっても、大通り沿いに商店が分布しているようなものではなく、街の一角に商店が密集している場所があるということだ。大規模な店舗もあるが、ほとんどは個人経営の店で、それぞれがささやかな生活を営んでいる。まさに二丁口の庶民の風景を象徴するような場所だった。

ミルは最初、アクセサリーなどの小物を売っているところに行きたいと言った。

「ああ、あと、言葉遣いは少し変えた方がいいように思うのですけど」

道中、ミルがそんなことを言った。

「どういことですか？」

「わたしたちは二人とも、少年少女といった風貌です。というか、実際そうです。それがこんな硬い言葉を使っていれば、目立つと思います」

「なるほど……」

「敬語をやめようとは言いません。わたしだってそれはちょっと厳しいです。少しくだけた物言いくらいで」

「分かりました」

自分はそんな気は回らなかったな、とシルリーは思った。やはり少し気真面目すぎるところがあるらしい。いつでもこのような調子では、自分にとってのフォードがそうであつたように、ミルも窮屈に感じるだろう。

夜の商店街は賑やかだった。人々の話し声や、店主の売り文句はもちろん、曲がり角で演奏されている笛や足踏みオルガンの音色も聞こえた。道を街灯や店の暖かい光が包んだので、夜だという意識もなくなりそうだった。

店に着いて、ミルはしばらく商品を見つめていた。木の枝で作った指輪、造花の髪留め、貝殻のブローチ……そんなものが並んでいる。

「これは何？」

ミルは壁に無数に掛けてある紐を指して尋ねた。

「ああこれは」

シルリーは机に並べられている穴の空いたワッペンのようなものの中から、星をかたどったものを手にとり、その穴に紐を通してぶら下げた。

「こうやって、鞆とか自分の持ち物につけるんです」

説明するシルリーを、ミルは感心やら驚きやらが混じった表情で見つめていた。

「どうかしましたか？」

「いえ、物知りなんだなと」

「そうですか？ 割と今流行っているじゃないですか」

「でも、こういうのって女の子の趣味でしょう？」

「まあ仕事柄流行とかは記録しておきたいんで、休日とかは自分の興味のない店にも立ち寄ったりしますよ」

シルリーがそう言うのと、ミルははっとしたような顔を見せ、シルリーの袖を掴みながら店の外に出た。

「何ですか、いきなり」

ミルの意図を測りかねてシルリーは困惑した声を上げた。

「だって、こんな店興味ないって……」

ミルは申し訳なさそうな顔で言った。

「そういう意味で言ったんじゃないですよ！ 俺は大丈夫ですから。次、どこがいいですか？」

それを聞くと、安堵したようにミルは「文房具屋」と言った。

結局五件ほど店を回った後、二人は道の端で休憩をとることにした。

「本当に、付き合わせてしまっでごめんなさい。でも、やっぱり今

日来て良かったと思っています」

ミルはそう言うと、途中で買ったジュースを口に含んだ。

「そういえば、結局それしか買いませんでしたね。あれだけ回ったのに」

シルリーは、単純に気付いたことをそのまま口に出しただけだった。

「ええ。買っても、すぐに使えなくなるから」

しばらく隠れていた、愁いを帯びた表情がミルの顔に現れた。そういうことか。シルリーも黙ってしまった。ここで売っているようなものは、二ー口の市長たる人間が使うようなものではないのだ。

「籠の鳥だったお姫様が一夜だけ庶民に交じって過ごす、なんてお伽噺を聞いたことがあります」

シルリーはどこを見つめるとなく言った。

「わたしは、その逆も、ですけれどね」

ミルは寂しげな微笑みを浮かべて言った。

不意に、鐘の音が響いた。機械時計がすっかり普及している世の中で、古の、別の時間を刻み続ける、鐘楼の鐘だった。二ー口の街では、午前六時と九時、正午、そして午後三時、六時、九時に鐘が時刻を知らせる。

ミルは不思議な音を聴いているような表情で、空のどこかを見つめていた。

「あつちですよ」

シルリーが指さした先を追うと、確かに鐘楼の先端が見えた。

「どうせ今日が最後なんだったら、上ってみますか？」

シルリーの提案に、ミルは少し驚いたようだった。

鐘楼は一般人でも自由に上ることができる。鐘が設置されているところの真下に、展望用の階が設置されていて、丁度二ー口の中心に位置するそこからは街の全貌が見渡せる。ただ、古い建築で、機械式のエレベーターも設置されていないので、そこに辿り着くまでには長い階段を登らなければならないが。

ミルも、展望室に着く頃にはすっかり息が上がってしまっていた。シルリーはしばらくミルが落ち着くのを待っていた。

展望室はガラス張りにもなっていないので、直接風が吹き込んでくる。この高さに吹く冬の風は、さすがに肌に痛かった。

ミルの息が整ったようだったので、シルリーは立つように促した。そして、ミルはそこから二丁口の街を見た。

世界があった。

近くには商店街の賑やかな明かりが。その少し奥に、美しい市庁舎が。振り返ると静かな住宅街が。その向こうに川が。その向こうに南部の森が。西には日の沈む海が。

全ての人々が暮らしている、世界があった。

「わたしは、この風景を背負っていくことになる」

ミルは自分に向かって呟いた。

「シルリー。わたしに、教えてくださいか。この鮮やかな街の、色々なことを」

その姿は、二日前に市庁舎で見た、ミル＝リラのものだった。

「喜んで」

冷たい風に、二人の髪は踊った。

第三話 「軍部」

晴天。空を下に見れば、底なし。こんな日の寒さはかえって心地よい。

サンはマフラーを巻くのも忘れて、自宅を飛び出した。鐘の音が聞こえる。鐘楼の深い音色ではなく、もう少し高い、何かを祝福するような音。市庁舎のセレモニーベルだ。それを聞くと、サンの足は一層速まった。今日だけは遅れてはならない。今日は特別な日だ。フォード・ダングルが辞任の意を表明した時、二ー口の街は空前絶後の騒乱に包まれた。史上もつとも名君と言われたフォードが特別な理由もなく辞めると言い出したのだから当然のことだろう。フォード自身、辞任に関しては「わたしは長く市長の座に着き過ぎた」としか発言しておらず、なお世間の騒ぎに関しては「次の市長に関しては信賴のできる人物を選んだので安心してほしい」とのこと。世論も、フォードの辞任は口惜しいが、彼の推薦した人物ならば大丈夫だろうというところで落ち着いてきた。

そして、今日市庁舎のセレモニーホールで新市長の発表、就任演説が行われる。これは二ー口の一市民として、サンも参加せざるを得なかった。

着いた時にはホールは既に満席となっており、サンは立ち見を余儀なくされた。

——しかし。

慌てていて意識しなかったが、よく考えればサンはこのホールに入ったことなど数えるほどしかない。そう思うと急に緊張してきた。そう冷静になってみると、周りの雰囲気もかなり緊迫していることに気付いた。フォードの後継者だ。並の政治を行っても批判の対象になるだろう。ここにきてサンは市民の次期市長に対する期待と要求がどれだけ高まっているのかを理解した。

サンの息が整った頃、再び鐘が鳴った。辺りが静まると、壇上に

正装の男が現れ、「間もなく新市長の就任式を開始します」と告げた。

不意に最前列の方から拍手が沸き起こり、それは波状に広がっていった。サンも流されるままに拍手をした。しかししばらくしてサンは空気がおかしいことに気が付いた。これも最前列から、今度はどよめきのようなものが広がってきたのだ。そしてサン自身、その理由をすぐ知ることになった。

「おはようございます。皆さま、今日は寒い中、集まっていたいで心より感謝を申し上げます」

透き通るような声が響いた。サンも、ホールにいる誰もが自分の眼を疑った。

「この度ニーロの市長に就任いたしました、ミル・リラ・テクマと申します」

服装は確かにニーロ市長のそれだった。しかし、この距離からでも分かる。今壇上で話しているのはせいぜい十五、六の少女だ。何かの間違いか。フォードは血迷ったのか。聴衆の中には顔が青ざめていく者も少なからずいた。

「この世界はあまりに狭い」

ミルという新市長は、聴衆が十分に静寂を取り戻すのを確認してから続けた。

「神話にあるというだけでなく、わたくし自身、この街は狭いと感じております。すなわち、望むことができるのです。人と人が共存することを。古の物語には、最初の殺人は兄弟の間で起こったとあります。ですが、わたくしはそれが人間の本質だとは認めたくない。原因は常に環境、すなわち社会体制にあります。三十八年前、この街の南部で戦争がありました。この中にも、体験された方がいらっしゃると思います。仕方のないことだと思いでしょうか。いえ、わたくしたちは、このような悲しみを回避する術を持っているのです。繰り返します。この世界はあまりに狭い。ゆえにわたくしたちは望むことができるのです。共存を、平和を」

ミル・リラ・テクマの就任演説は平和についてのものだった。彼女の言葉は、案外上手く聴衆の心を掴んでいるとサンは思った。まず、「この世界はあまりに狭い」というフレーズ。この言葉の力だろうか、彼女はやけに壮大な人間に見える。そしてこの平和演説という選択。実際、市庁の改革は先代のフォード・ダンゲルにやり尽くされたといってもよかった。その上でなお民衆が望むものを平和ととらえた彼女は、賢明だったのかもしれない。

ミル・リラは、戦争などそもそも起き得ないような制度改革を行うと断言し、その為には手段を選ばないと言ってその演説を終えた。もちろん全ての人間の支持を得られた訳ではないだろう。しかし、あのような子どもが市長に就任したなどという事態、抗議運動や暴動に発展しなかったのは十分驚くべきことだと思えた。そういう意味で、ミル・リラの市民への第一印象は良好だったのではないかとサンは思った。そして、そう考えていくうちに、似たような雰囲気を経験したことがあるような気がした。答えはすぐに見つかった。幼い頃に見た、フォード・ダンゲルの就任演説だった。あの圧倒的な自信を感じさせる態度、民衆の望むものを的確に捉える観察力。そういったフォードの影を、どうもあのミル・リラは背負っているように思われた。

翌日、サンは道中で新聞を購入した。一面には、「ベルの前の天使」という見出しとともに、純白の絹のドレスに身を包んで演説をするミル・リラの姿があった。背景映り込んでいる天使の彫刻がやたら目立っているところに撮影者の恣意的なところが見え隠れした。ざっと目を通して見ると、演説の全文が載っており、ミル・リラの市政には大いに期待する、彼女は必ずや恒久的な平和をこの街にもたらしてくれるだろう、といった趣旨のことが書いてあった。まだ政治を行ってもいないのにそういった評価を下すのは早計すぎるのではとサンは思ったが、とにかくミル・リラが一定の層の人間の支持を得たのは確からしい。また別の新聞には、「十六歳の子ども市長」という見出しで、殊更にミル・リラの若さについて、その問題

点が書いてあった。

一方、当のミルも当然その報道を目にしていた。場所は市庁舎の市長室。昼休み、側近のシルリーが主要な新聞をあらかた買つてくると、ミルはそれらを、紅茶を飲みながら眺めた。

「これは少し恥ずかしいですね」

ミルは「ベルの前の天使」の見出しを見て言った。

——今の姿は、やはり年齢相応なんだけど。

シルリーはそんなミルを見て思った。シルリーにとってミルという人間はやはり二面性を持っていた。市長という立場に怯える少女の顔と、圧倒的な自信を持って民衆の前に立つ顔。単に公私を分けていると片付けるにはあまりに違いすぎる。

実際、市長としてのミルの第一歩は順調なようにシルリーにも思われた。確かに報道では賛否両論だが、賛同の声があるだけ良い方だろう。シルリーの眼から見て、ミルの演説はフォードがかつて行った形を踏襲していた。それがあからさまであればただの猿真似に終わっただろうが、ミルの場合加減が絶妙だった。自らのオリジナリティーは失わずに、その背後にフォードの権威を感じさせた。民衆の心を掴む演出としては優秀だった。

「シルリー、散歩に付き合ってくださいませんか」

ミルはそう言って新聞を置いた。二人は市長室を出て、広場へと向かった。その途中、廊下で、一人の役人に声をかけられた。

「おや、少年少女たちはのんきにデートですか」

ミルはその声に足を止めることなく、
「お好きに仰ってください。いずれそのような口も利けなくなるのですから」

と言い放ってすれ違った。

「市長が若いのをいいことに、実権を握ろうと画策している者も多いことでしょう。あの男のように」

市庁舎を出て、シルリーはミルに言った。

「ええ、怖いですね」

ミルは言葉とは裏腹にあまり気にしていないように見えた。

午前中若干の雨が降ったが、もう空は晴れ渡り、広場の草木は雨粒を光らせていた。雨の為家に引っ込んでいた子どもたちも、少しずつ広場に集まってきているようだった。

「ここは本当に良い広場ですね。市庁舎の前にあつて、こんなにも市民が集まっている。シルリー。今の市庁舎はいつできたのですか」シルリーがミルと初めて会ってから一ヶ月、ミルはよくこういう質問をしてきた。この建物はいつ、どういう背景で築かれたのか、とか、二ーロのこの風習はどのようなことに由来しているのか、など。その度にシルリーは丁寧に答えた。

「現在の市庁舎が建てられたのは三〇一年、今から二百九十年前です。二ーロが王制を廃止してから間もなくのことでした。当時はラッサーバルトウクトラッテクマの治世で、この街で最も芸術が花開いた時代で、この建物や広場もその一環として建設されたということです」

「当初から、こんなガラス張りだったんですか」

「どうやらそうらしいですよ。驚くべきことですが。細かい改修は行われていますが、基本的には建設当初のままだと伝えられています」

ミルはいつもシルリーの話を興味深げに聞いた。その様子を見ていると、シルリーはミルがまるでこの街のことを初めて知った人間のように思えた。

不意に、ミルの体に一人の男の子がぶつかってきた。どうやらよそ見をしながら走っていたらしい。反動でバランスを崩した男の子は転んでしまった。

「大丈夫？」

ミルは男の子の手を取って立ち上がらせた。

すぐに遠くから中年の女性が駆けつけてきた。男の子の母親だろう。彼女はまず男の子を確認した後、ミルの顔を見るや否や大慌て

で謝ってきた。

「どうかお気になさらないでください」

ミルは笑って答えた。

「ですが、お召し物が……」

男の子の手は汚れていたらしく、ぶつかったときに泥の跡がミルのスカートについてしまっていたようだった。

「ああ、平気ですよ。外に出るときは汚れてもいい服を着ているので。それより、お子さんは大丈夫でしたか？ 転んでしまつて」

「このくらい、何のことはありません。本当に申し訳ありません……」

母親は何度も謝り、去っていった。

「ミル、その服は比較的高価なものだったのでは？」

しばらく経ってシルリーは尋ねたが、

「そうだとすると、広場にそんな高価な服を着てくる方が悪いんです」

とミルは答えた。

「シルリー」

ミルは両手を広げ伸びをして、空を仰ぎ見た。

「晴れていて、気持ちがいいですね」

「……ええ」

シルリーも笑みを浮かべた。

ミル・リラの市長就任から一週間が経った。

市庁舎の廊下を、一際目立つ男が歩いていた。巨体に赤く長いマントをなびかせ、その勇猛さを示すかのように口髭をたたえている。眼光は野生動物のように鋭く、この寒さの中むき出しになっている腕には細かい無数の傷があった。ニーロ軍部の長、オッタス・テンである。

そんな彼の進もうとする先に、もう一人男の姿があった。つい最近までこの街の最高権力者であった男、フォード・ダングル。

「久しぶりだな、オッタス」

フォードは立ち止まり、オッタスに話しかけた。

「まさか貴様が辞任するとはな。どういう腹づもりだ」

オッタスも立ち止まり、厳しさを含んだ笑みを浮かべて言った。

「報道の通りだ。わたしは長く市長をやりすぎた。お前はミル・リラの招集した会議か」

「そうだ。まあ挨拶程度の会だ。すぐに終わるだろう」

「ああ。それではな」

フォードはオッタスの後方へと歩いていった。オッタスも、集合同所とされている会議室へと向かった。

会議室には円形に席が配置されており、誰もが発言をしやすいようになっていた。見回すと、役人だけではなく、社会的な影響力を持つ企業の重役の姿なども見られた。

先ほどオッタスが言った通り、これは市長就任の挨拶のようなものだった。新しい市長が役人などを集めて顔合わせの会議を招集するのは、ひとつのしきたりのようになっていた。

「軍部」と書かれたプレートが置かれている席にオッタスは着いた。

招集された人間が全て集まったところで、市長は会議室に入ってきた。「市長」のプレートが置かれている席の前に立つ。就任式の時もそうだったが、やはりこの顔ぶれの中でこの少女は浮き立って見える。

「皆さま、今日はお集まりいただきありがとうございます。今一度挨拶をさせていただきますと、この度二ーロ市長に就任いたしました、ミル・リラ・テクマと申します。これから共に市政の舵を取るということ、どうかよろしく願います」

ミル・リラは定型的な挨拶を述べ、周囲は拍手で応えた。オッタスも、歳の割には頼れそうだななどと思いながら、ただその光景を眺めていた。

「では挨拶はこの辺りにいたしまして、本題に移らせていただきます

す」

市長はそう言い席に着いた。この言葉に思わずオッタスの眼は開いた。形式的な顔合わせの会議だと思っていたが、どうやらそれだけではなかったらしい。そんなことは、ここにいる誰もが予想できなかっただろう。そもそも市長になったばかりのミル・リラに今何ができるというのか。

「ここには、市内で一定の、いわゆる勢力というものを形成されている方々に集まっていたつもりです。わたくしは、就任演説でも申し上げましたように、この街の平和を第一として行政に携わらせていただくつもりです。つまり、皆さまが協調して互いに関わってゆけるように、相互の利害を調整する、仲買人になりたい。そして、どこか一つの機関に力が集中するような事態も避けるため、各部署の再構築も行いたい。これが今日皆さまをお呼びした理由です」

騒然とはならなかったが、明らかに場の空気は変わっていた。ミル・リラが言ったことは、かなり抜本的な改革を意味する。もっと言えば、これまで一定の利益を独占していた者がその権限を取り上げられたり、ある程度の力を有していた部署が縮小されたりすることがあるということだ。当然思い当たる節のある者たちは張りつめた表情を浮かべた。

それからの会議の進行は主にミル・リラの政策の説明だったので、取り立てて何か発言する者はいなかった。急なことであるので、今日の会議は説明に留まり、質疑応答や議論などはまた機会を改めてとのことだった。

会議の劇的な展開に多くの人間が茫然としている中、オッタスは冷静にミル・リラの改革の矛盾点について考えていた。

そもそも、協調の為に、仲買人を務めたり、再構築を行ったりするのは、完全に中立な立場の人間でなければならない。ところがミル・リラは彼女自身が市長であり、それこそ最高権力者だ。その彼女自身が主導してこういった改革を進めるということは……。

予定通りその会議が市長自身による説明で終わると、部屋は一気に人々の話し合う声で包まれた。オッタスは周りの人間が全て退室するまで座って待っていた。

オッタスが部屋を出るまでには三十分近くかかった。静まり返った市庁舎の廊下を歩いていると、また前方にフォードの姿が見えた。

「よく会うな、フォード。偶然か？」

「会議はどうだった」

「確信した。貴様はまだ市政に対して発言力を持っているな」

「そうだとしたら、どうなのだ」

冬の空気が、文字通り凍った気がした。

「貴様とはよく喧嘩したものだ、久々にまたやることになりそうだな。一つ、でかいのを」

「それならば、忘れない方がいい。お前が相手取るのはこのわたしだということを」

そうして二人はすれ違った。オッタスⅡテンはそのまま市庁舎の出口へ、フォードⅡダングルは首に下げたペンダントを握りながら廊下を歩いていった。

既に夕暮れ時と呼ばれる時間帯となり、オレンジ色の光がガラスを通り抜けて足元に差した。このとき、おそらく二人とも、一つの風景を思い出していた。二丁口の街の南部と北部を分け、西の海にそそぐ、夕日に映えるセマーヌ川と、それに架けられたささやかな木の橋を。

第四話 「二月二〇日事件」

五九二年 二月二日 ミル・リラ・テクマが市長に就任

二月九日 平和会議が市庁舎で開催

二月二〇日 二月二〇日事件が起こる

二月二〇日。シルリーとミルは仕事帰りに北部の森沿いを歩いて
いた。ここは二ー口の街で、南部の森の次に人通りが少ない場所。
夜になるとほぼ誰も近寄らない。数時間に一度、軍部の警察官が巡
回に来る程度だ。

「こんなところに連れてきて、何を見せるつもり？」

市長として是非見てほしいものがある、と言ってシルリーに連れ
てこられたミルだが、さすがに怪訝な表情であつた。シルリーから
数歩離れてその背中を追う。

「まだ秘密です。それより、寒くはないですか？」

「正直、結構寒いかな」

ミルが応えると、シルリーは自らの上着をミルに差し出した。ミ
ルは少し戸惑つたが、それを借りることにした。

それからさらにしばらく進んで、腰掛けるのに丁度よい大きさの
岩が現れた。シルリーは、ミルに座って休憩するように促した。

「ミルは二ー口の平和を実現したいのですね」

シルリーがぽつんと言つた。

「ええ」

「俺が言うのもなんですが、大変ですよ。歴史上、一時的な平和の
時代はあつたにせよ、結局いつかは崩れている。俺自身、どうした
らこの戦争は回避できたのか、とかと考えたこともありましたが、
やはり難しかったです」

「だから、恒久的な平和を実現するには、そのように制度を変えて
いくしかないと思つたんです。戦争に至るような対立がそもそも生

まれないように、この街を変えていきたいんです」

ミルの眼には、遠くで光っている北部の街があった。その眼は、どこかもっと遠くを見つめているようだった。

「その為には、力を持ちすぎる勢力が存在してはいけない。そうですね？」

シルリーの問いに、ミルは頷いた。

瞬間、ミルの息が止まった。顔は動かさずに、視線だけ動かす。首には空気より冷たい金属の感触。心臓の鼓動が速くなるが、精神の冷静さだけは保とうと努める。

「なら、歴史家も街の平和の為には邪魔ですね」

恐ろしいことに、それはシルリーの声だった。ミルが今まで聞いたこともないような、ぞつとするほど冷たい声。そしてその歴史家は、横から自分の首に短剣を突き付けていた。

「ミル」リラ「テクマ。これからあなたを拉致する」

ミルは周囲の状況を確認した。よく見ると、自分を囲むいくつかの人影がある。

「抵抗しようなどと考えない方が身の為です。今あなたは『歴史』の兵に囲まれている」

「なぜ、このようなことを」

ミルは慎重に、意識的に唇を動かして、低い声で尋ねた。

「我々も決断には非常に苦労しました。しかし、何度議論しても結論は同じだった。九日の平和会議によって決まった市庁内の役職の再構築。それをあなたが行うということは、市長以外に力を持つ勢力を市長が意図的に排除するということ。あなたの狙いは、歴史家も軍部も潰して自らの独裁政権を打ち立てることに他ならない。つまりあなたが行おうとしていることは市に対する反逆だ。代々市政を見守ってきたコランデューの人間として、これを阻止します」

ミルはもはや何も言わなかった。実はこのとき、ミル自身、護衛を数人連れていた。それなのに助けが来ないということは既に「歴史」の兵に取り押さえられているということだろう。自分ひとりの

力では目の前のシルリーから逃れることすらできない。

「『見てほしいものがある』なんて、歴史家は嘘つきですね」

「それはお互い様でしょう」

シルリーが手を挙げると、兵が三、四人集まってきた。ミルも覚悟を決め、目を閉じた。

「そこまでだ。歴史家よ」

不意に、シルリーとはまた別の男の声がした。シルリーが即座に辺りを確認すると、自分の兵が取り囲むさらに外側を、見覚えのない兵に囲まれていた。やがてシルリーの視界に一人の男が入り込んできた。

「市長に刃を向けるとは、お前こそ反逆者だな」

そう言ってシルリーに拳銃を向けているのは、見知った男だった。「フォード」ダングル……？」

あまりに意外な男の登場にシルリーは啞然としたが、すぐに我に返り、ミルの首から剣を離れた。

——あれはフォード「ダングル」の私兵か……。噂には聞いていたが、実際に見たのは初めてだ。残念ながら数では負けているようだな。

しかし即降伏を迫られるような戦力差でもない。シルリーは剣の先端をフォードへと向けた。

「ミル」リラを解放しろ。交戦したら傷を負うのは間違いなくお前だ」

フォードはシルリーににじり寄った。シルリーとフォード個々人の戦力だけ見ても、短剣と拳銃では話にならない。

「行ってください」

シルリーはミルにフォードの方へ行くことを促した。ミルは一瞬躊躇ったが、立ち上がってフォードのもとへと駆け寄った。

「さて、反逆者シルリー」コランデューよ。どんな処分がお望みだ？ こちらの増援もそろそろ着く頃だ」

シルリーはそれでもなお冷静さを保っていた。その眼は街の方へ

向けられていた。

「こんなことをしている場合なんですか、フォード」ダングル」

シルリーは街の明かりを指さした。フォードは拳銃をシルリーに向けたまま街の方へと視線を移した。

煙が見えた。それも一つではない。街を取り囲むように狼煙が上がつていた。

「あれが何を意味するか分かりますか」

シルリーは不敵な笑みを浮かべて言った。

「オツタス」テンの蜂起」

そのシルリーの言葉を待たずに、フォードは自らの兵に指示を出した。次々と人の気配が消えてゆき、フォードも数人の護衛とミルを連れて去っていった。

完全に兵の気配が消え、フォードの姿が見えなくなると、シルリーも自らの兵に撤退命令を出した。そして森が再び静まりかえると、脱力したように岩に腰掛けた。

「失敗か」

森の中からひと組の男女が現れた。一人は、五十は超えているように見える男で、身体は鍛えられており、身長はシルリーより高く、武具を身につけていて、髪や髭は既に白色になってしまっている。もう一人は、恐らく二十代の若い女で、黒髪を一つに縛り、登山者のような服装をしている。それぞれオルケ」シツハ、イーア」シツハといった。

シルリー自身が述べたように、歴史家は単なる歴史を研究する学者の一族ではない。いや、かつてはそうだったのだが、ある権力者が政治に対する理解が深い者として歴史家を重用し始めたのをきっかけに、宰相のような役割を担うことになった。そうして歴史家はその力を増していき、こんにちでは「歴史」と呼ばれる独立した組織を形成するに至った。「歴史」はコランデューの後継者を筆頭とし、大きく学術と軍事のグループに分かれている。シツハは「歴史」の軍事の大部分を担う一族だった。

「まさかフォード」ダングルに先手を打たれているとは、さすがに読み切れなかった」

オルケは言葉とは裏腹に落ち着ききつた調子で言った。

「それに関しては俺のミスだ。すまなかった」

シルリーは疲労した様子だった。

「大丈夫？」

イーアはシルリーの体力的なことよりも、精神面の心配をしていた。シルリーも一時は市長に心を許していた。そのミルに反旗を翻すに至ってはそれなりの葛藤があったと見るべきだろう。

「何にせよ、あちらは成功だ」

シルリーはずっと二ー口の街を眺めていた。

「歴史」がこの事件を起こすに至るには、話を一週間ほど遡らねばならない。

五月一日。

深夜十一時、コランデュー邸に一人の来客があった。直接の面識はなかったが、シルリーも知っている顔だった。髪は赤毛に近く、肩に届く前に切り揃えられており、軍服を着ている、女だった。年齢はシルリーと同じくらいに見える。

「このような夜分遅くに参上する非礼をお許してください。二ー口軍部長の娘、ロールロット」テンと申します」

軍部の人間にしては礼儀正しいな、とシルリーは思った。

ロールロットが上がらせてほしいと言うと、シルリーは彼女を連れて隣の書庫へと向かった。四階まで上り、簡素なテーブルに着き、電灯ではなくランプを点ける。

「軍部が、『歴史』に何のご用でしょうか」

シルリーは小さめの声で話し始めた。この時間帯に軍部の人間が「歴史」を訪問するなど、ほとんど極秘裏の用件だと言っているようなものだ。

「新市長が開催した、平和会議の内容に関してご存知でしょうか」

「知らないはありますがありません」

「それに関して……何か思うところは？」

「そんなことを言わせる気ですか」

この辺りでシルリーにはロールロットの訪問の目的がだいたい分かっていた。

「単刀直入に申し上げますと、市長は『歴史』も軍部も徹底的に排除する方針だと軍部での意見は一致しています。賢明なあなたならそこは理解されていると思います」

ロールロットの言うことは分かった。ミルは先日 of 平和会議である程度の勢力を誇る部署はその規模を縮小する、と暗に言った。市長先導でそれを行うということは、市長自ら「歴史」と軍部を取り潰しにかかったということ。シルリーとしても何らかの対策は打たなければとは思っていたところだった。

「軍部と同盟を組んでいただきたい」

ロールロットは特に力を込めて言った。

「軍部は今月二〇日に市長に対しクーデターを起こすつもりでいます」

「二〇日？ また急な」

「事態が急を要するということについて異論はないはずです。具体的には、『歴史』の方にも同日行動を起こして頂きたい。軍部とは別の形で」

「……返答は一日待って頂けますか。明日中にこちらから使者を送りましょう」

「よい返事を期待しています」

そこで話し合いは終わり、シルリーはロールロットを一階まで送った。

「今更ですが、尾行などは大丈夫でしょうね」

ロールロットの帰り際にシルリーが言うつと、

「このわたしがそんな失敗をするとても？」

と言つて彼女は去つていった。

シルリーが家に戻ると、イーアが待っていた。シルリーはイーアを連れて書庫の四階へと戻り、ロールロットとの会話の内容を明かした。それから二人で議論を重ねたが、結局シルリーの結論は最初のものと同じだった。

「やはり、この話には乗ることにしよう。二〇日、市長を拉致して我々の軟禁下に置く」

シルリーはどこか悔しげな表情でそう決断した。

「軍部と同盟なんか結んでいいの？」

「使い捨て同盟だ。二〇日の一件が済めば、同盟関係など消滅さ。軍部とともにクーデターを起こしたところで、成功後に主導権を向こうに握られるのは目に見えているからな」

こうして五九二年、いわゆる二月二〇日事件は起きた。シルリーはこの事件の後しばらくどこか虚ろだったという。

第五話 「南北分裂」

イーアは街の北部、とあるパン屋の前に立っていた。今一度看板を確認する。「開業 午前八時から午後五時まで」。現在時刻は午前九時。それなのに店員の姿が見当たらない。休業なら店が閉まっているはずだが、そういうわけでもない。イーアは仕方なく別のパン屋に回った。こちらはしっかりと営業していた。一人で食べるには多すぎるほどの量を買ひ、ついでに店員に尋ねる。

「何だか人がいない店、多くありません？」

「今日、市長が臨時の集会を開くとかいう話だからね。客も全然来ないし、うちももう少しで閉めさせてもらって、集会に行こうかね」

イーアは店を出て、さらに途中で新聞を数冊買い、市庁舎へと向かった。広場は既に人でごった返しており、冬だというのに熱気すら感じられた。まだ市長の姿は見えないので、イーアは広場の端にあるベンチに座り、新聞を広げた。

あんな事件があった翌日だ。当然どの新聞も一面あの事を取り上げている。「軍部、市庁に宣戦布告」。そう、シルリーの「オッタス」テンの蜂起」という言葉はとつさに機転を利かせたものであつて、軍部は宣戦布告をしただけであり、フォードはあの場で街に引き返す必要はなかった。軍部がクーデターという形をとりながら奇襲に出なかったことに対し、イーア個人としては若干の疑問を抱いていた。

総じて見て、意外にも多くの新聞社はミル・リラに同情的であつた。確かに若すぎる市長の就任がクーデターの引き金になったという面は否めないが、それでもミル・リラは被害者であるというのだ。実情を知っている者からすれば、昨晚のクーデターはミル・リラの若さとは関係ないということが分かるのだが。そしてミル・リラへの擁護の背景には、未だに根深く続く南北の対立感情があるというのは誰の眼にも明らかだった。クーデターを起こしたのは軍部、二

一口南部を代表する勢力だ。当然北部の民衆の敵意はミル＝リラではなく軍部に向くだろう。

そして、新聞を見て意外なことがもう一点。どの新聞にも、歴史家の謀反という事実が書かれていなかった。確かに、あの出来事を知っているのは「歴史」の人間とミル＝リラ自身、そしてフォードの勢力だけだ。ミル＝リラが口を閉ざせば、世にこの事実知られることがないだろう。では何故そうしたのか、と考えると、市庁は「歴史」と軍部を同時に敵に回す気はない、という意思表示とるのが妥当だろう。「歴史」と軍部が手を組むわけがないということは市庁側もよく分かっている。

この集会も昨晚の事件に関連して開かれたというのはほぼ確定している。ここでミル＝リラがどう動くのか、「歴史」の関心は非常に高かった。だから食料調達も兼ねて、「歴史」の人間として顔が割れていないイーアがここに送られてきたわけだ。

セレモニーベルが鳴った。どよめいていた人々は静まり、市長の登場を待った。やがて市庁舎を背に用意されたステージに、ミル＝リラが現れた。心なしか、先日の就任演説よりも豪華な服装をしているように思われた。その白いドレスに包まれた姿は、どこか古の肖像画に描かれた王族のようだった。

「朝早くからお集まりいただいて恐縮です。既にお察しの方も多いと思いますが、軍部のオッタス＝テンがわたくしたち市庁に向かつて宣戦布告をしてきました。市庁を打倒して、軍事政権を打ち立てるつもりです。そして、昨晚、オッタス＝テンから使者が送られてきました。このクーデターの主犯は軍部ですが、セマーヌ川以南の街の人々も彼を支持している、やがてオッタス＝テンを大統領とし、ニールから独立すると」

聴衆は一気に騒がしくなった。

イーアからすれば、ミル＝リラの言っていることは半分虚構だった。オッタスが反旗を翻したのは、軍部が再構築の対象となったからであるとミル＝リラは他の誰よりも理解しているはずなのだ。そ

れを単なる野心ゆえのクーデターとし、さらに南北の対立を煽るような表現をしたことは、民衆の印象を操作しているとは思えなかった。

——ミル＝リラはもちろんフォード＝ダングルの傀儡に過ぎないだろうけど、役者としては案外優秀かもね。

そんなことを想いながらイーアはミルの言葉に耳を傾けた。屋外なので声も響かない。ミルは民衆が十分に静まるのを待った。

「この街が南北に分断されてしまうのは悲しいことです。ですが南部がその姿勢を崩さない以上、わたくしたちも対抗せざるを得ません。今は北部としても、更なる結束を必要とする時だと思います。あなた方北部の人々は、わたくしミル＝リラ＝テクマを長として、ついてきて下さるでしょうか」

瞬間、熱狂的とすらとれる声援が上がった。その様子にイーアは驚きを禁じ得なかった。最初は、もともとミル＝リラを支持していた勢力だけだと思っていが、次第に民衆の全てがミル＝リラを賛美する声を上げていた。

もともとミル＝リラにはある程度のカリスマ性があつた。そして、今や軍部、いや南部という共通の敵が出来た。そんな北部の民衆が、ミル＝リラという指導者のもとに結束したのはある意味当然の流れなのかもしれない。

——これが、フォード＝ダングルの書いたシナリオ。

イーアは広場を後にし、北の森へと向かった。

「ただいま」

街から離れた森は静かで、小鳥のさえずりと葉擦れの音しかない。進んでしばらくすると、急に木の数が少なくなり陽が当たるところに出る。そこにシルリーとオルケはいた。

イーアはリュックサックからシートを取り出して地面に敷き、その上にバスケットに入ったパンを置いた。

「ご苦労だったな、イーア」

オルケはシートの上に移動してパンを食べ始め、イーアもそれに

続いた。その光景は、状況とは裏腹に、ピクニックのようなのどかさを持っていた。

「で、どうだった？ 街の様子は」

オルケが尋ねる。

「南北分裂つてところ。正確にはミル・リラが南北の対立を煽って熱狂的な支持を得た。明日からは大変なことになるでしょうね」

「我々は？」

「何とどこの新聞にも、『歴史』については書かれていなかった。軍部と『歴史』をいっぺんに敵に回す気はないってことだと思うよ。要するに、黙つてろ、ってことかな」

「そうか。それではどうする？ シルリー」

オルケがシルリーの方を見ると、パンに手もつけずに下を向いて座っていた。

「朝からあんな調子なの？」

イーアは小声でオルケに尋ねた。

「ああ。あのミルとかいう市長が敵になってしまったことがよっぽどショックだったらしいな」

「違う」

シルリーが反応した。

「地獄耳ね」

イーアは笑った。

「ミルがどうしたとかいう話じゃなくて、ついこの前まで友好的に過ごしていたのにこんなにも簡単に敵対してしまうのか、と嘆いているだけだ。市庁勤めでありながら市庁を敵に回してしまったという不安も確かにあるが」

「何が違うんだ」

オルケは馬鹿にしたように笑った。シルリーは大きく咳払いをした。

「それより、これからどうするの？」

イーアが真面目な表情に戻って言った。シルリーもシートの上に

移ってきた。

「もちろん戦争屋と一緒にあってクーデターに参加する気はない。市庁側がどう出るかが気になっていたが、『歴史』のことが新聞に載っていなかったというのならば、やはり今のところ敵意はないと見て構わないだろう」

シルリーはこのように、軍部のことを戦争屋と呼ぶことがある。歴史家と軍部の関係が良好ではないのは今に始まったことではなく、そういう意味で昨晚の同盟は非常に稀なものだったのだが、シルリーは特に軍部を毛嫌いしている歴史家だった。

「だから、普通に家に帰って過ごしていればいいんじゃないか？暗殺さえ気をつけていれば。放っておけば市庁と軍部で勝手に潰しあってくれるだろう。ミルの拉致が失敗した以上、しばらくは傍観だ」

「では、街へ戻るか」

オルケは立ち上がり、イーアも続いた。

「精神力が決断力に追いついていないといったところか。市庁への謀反をあの手で決めたのは評価できるが、御覧の通り未だにウジウジしている」

オルケはシルリーから少し離れたところでイーアに言った。

「シルリーは昔から、感情は後からついてくる子だったからね」

イーアとしてもシルリーの精神状態は割と本気で心配しているのだが、どうケアしたものか図りかねた。

「聞こえている」

シルリーも追いかけてきた。

結局シルリーは自宅に戻った。市庁側から表立って攻撃を加えられることはないだろう。刺客が送られてくる可能性はあるが、それはどこにいても同じだ。さすがに市庁に出勤することは憚られたが、それ以外は普段通りの生活を送っていて差し支えなさそうだった。

その夜、来客があった。見知った顔、オッタスの娘、ロールロッ

トだった。シルリーはまたロールロットを書庫の四階へと招いた。
「ミルリラの拉致は失敗されたそうですが、ご無事で何よりです。
今の状況はご存知ですか？」

ロールロットの口調は相変わらず丁寧だったが、今日はやけに強
気な声に感じられた。

「ある程度は」

「それなら話は早い。我々軍部と手を組んでいただきたい」

——やはり。

こういう話だとは予想していた。いくら軍部が戦争を専門にしてい
るとはいえ、南部の人口は北部に比べて少ないし、フォード・ダ
ングルの私兵もそれなりの力を持っている。軍部だけで市庁に対抗
するのは厳しい。しかし。

「残念ですが、そういうわけにはいきません」

シルリーの言葉に、ロールロットは意外そうに目を開いた。

「何故。今や市庁は共通の敵であるはず」

「軍人さんと組んでクーデターを起こしたところで、その後の主導
権を握られるのは目に見えています。そんな前例はいくらでもあ
る。実際、あなた方もことが上手くいってしまえば最後は我々も抹
殺するおつもりでしょう？」

ロールロットの悔しげな顔を見れば、恐らく凶星だったのだろう。
こうして心情を隠しきれないあたり、やはりまだ若い。

「何か勘違いしているようだけど、あなたに拒否権はないの」

ロールロットの口調が変わった。もはや敵に向けるのと同じ声だ
った。

「と、言いますと？」

「既にこの建物は包囲されている。わたしが合図を出せばすぐにで
もあなたを捕えられる」

「ようやく本性を表しましたね。戦争屋さん。どうぞ、指でも好き
に鳴らして下さい」

「……後悔しない」

ロールロットは胸のポケットから小さな鈴を取り出して鳴らした。鈴の小ささの割に、かなり大きな音が建物じゅうに響いた。鈴の音が止み、待っていたのは静寂だった。

次第にロールロットの表情に焦りが現れた。椅子から立ち、短剣の先をシルリーに向けながら、辺りを見回す。

「どうして誰も来ないのか不思議でしょうがないだろうから、説明してあげよう。さすがに堂々とこの建物を取り囲むわけにもいかなidだろう。だからまあ屋根裏とかそんなところに兵を潜ませるしかなかったと思う。実はこの建物で潜める場所っていうのは限られていて、それを俺は全部把握しているんだな。戦争屋さんの兵とはいっても、こんな慣れない場所じゃうちの兵に制圧されてもしょうがないよな」

ロールロットの顔から余裕は完全に消えていた。

「安心しろ。命を奪うようなことはしないように言っただけである。あなたをここで殺すつもりもない。帰ったらオッタスに言っただけやるといい。歴史家一人手玉に取れないようでは、フォードの相手など務まらない、と」

ロールロットは、最後まで剣先はシルリーに向けながら、窓の手前まで退いて、そこから飛び降りた。

「そんな無茶して逃げなくても、深追いする気はないんだけどな。

ここ、四階だぞ」

着地しても怪我をした様子もなく走り出すロールロットをシルリーは半ば驚きの表情で見ている。

「すっかり悪役が板についているな、シルリー」

シルリーが気付くと、背後にオルケがいた。

「俺も慣れない役を度々やって疲れているよ」

シルリーは再び椅子に掛けた。

「しかしこれでは……」

初めてオルケは不安げな表情を浮かべた。

「ああ」

シルリーは短剣を取り出して、ランプの光を反射する刀身を見つめた。

「眠るときは気を付けなければならなかった。今までの二倍」
指先で剣を器用に回して、鞘に納める。

「やられる前に、仕掛けた方がいいかもな」

第六話 「市軍開戦」

二―口の日には海に沈む。この時間帯、浜辺だけはどの季節でも暖かい心地がする。現在にしても、気温は恐らくかなり低いのだろうが、心なしか身体が動きやすい。

砂浜にはシルリーの足跡が長く続いていた。目指す建物はまだ遠く、遙か前方にその姿がかすかに見えている。レンガ造りの古風な塔で、一見レストランのようにも見えるが、この建物が本当はどう利用されているか、知っている市民は少ない。会談用である。それもあまり目立ちたくない時に使う。

先日、またシルリーの家に使者が来た。今回は軍部ではなく、なんと市庁の者ということだった。そしてシルリーにそれを疑う余地はなかった。男は、シルリーとも面識のある市庁の役人だったから。用件は会談の取り付けだった。何の為の会談かは明かされず、一人であるようにということだった。かなり胡散臭い話なのだが、現在市庁と積極的に争う理由を持たず、さらに軍部との関係が悪化した「歴史」にとって市庁からの直接の情報は得たいところだった。シルリーは会談に出席すると答えた。ただ、一人で、とは言われたが、密かに護衛をつけて。

十五分ほど歩いて、建物の前までたどり着いた。門はひとりでに開き、老紳士がシルリーを出迎えた。市庁の人間か、と尋ねたが、紳士はこの建物の管理者であって市庁とは関係がないらしい。建物は外から見たより広く、それこそ会議用の建物のように一つの階に部屋がいくつも入っていた。老人はシルリーを案内して三階まで上り、一つの部屋の前まで立ち止まった。扉には「星の間」と書かれたプレートが埋め込まれていた。紳士はノックをすると扉が開くのを待たずに階段を下っていった。会議中の部屋の中はなるべく覗かないのがこのマナーだとか。

扉を開けたのは、ミルだった。

予想はしていたが、緊迫した展開にシルリーは息をのんだ。そして部屋にはミル以外に誰もいなかった。当然、自分がそうであるようにどこかに護衛はつけているのだろうが。

部屋には市庁舎にあるような上質なテーブルが用意されていた。窓がなく、外の景色が見えないので、市庁舎の中だと言われれば信じてしまいそうである。

シルリーは会談に臨む緊張感を保つとともに、どこかこの空間に懐かしさを感じてしまった。まだ何もかもが始まっていなかった頃、互いに疑わずに済んだ時を。

「久しぶり、でもないんですよね。実は」

軍部のクーデターが起きたのは二月の二〇日。そして今日は三月一日。せいぜい一週間と少ししか経っていない。それでも確かに、シルリーにとってミルと隔絶されていた時間はもつと長かったように感じられた。

シルリーは話さなかった。自分はミルから見れば裏切り者である。この場においては大きな態度をとれる立場ではない。ただ相手が話を切り出すのを待った。

「この部屋からは残念ながら見えないけど、今の海は綺麗なんですよ。ね」

ミルはなかなか本題に移ろうとしない。シルリーは黙っている。しばらくして、ミルは諦めたように溜息をついた。

「そうですね。そろそろ本題に入りましょう。率直に言います。あなたには市庁の傘下に入ってほしい。ただ、目的も分からない人間に加担する訳にもいかないでしょうから、これからわたしの考えを説明します」

「ミルの、ではなくてフォードの、でしょう」
「いいえ。わたしの、だよ」

二〇日の件からしてもミルの後ろにフォードがついているのは明らかだった。それなのにこんな場でもフォードの傀儡であることを否定する理由がシルリーには分からなかった。

「わたしの当面の目標から言います。それは、女王として即位して、ミル＝リラ朝二一口を創始すること。あの日シルリーが指摘したことは、間違つてなかったね」

「壮大な話ですね。何故そのようなことを」

「わたしは市民に嘘はついていない。わたしが二一口の平和を望んでいるのは本当。その実現のためには、独裁という手段が最適だと思つたまで」

「その独裁の実現には、歴史家は邪魔なのでしょう？」

「あなたは誤解している。確かにあの平和会議、一連の再構築は、強大な勢力を縮小するためのものでした。でも、歴史家は必要です。今市庁側についてもらえれば、軍部を打倒したのちも厚遇する、これは約束します。ただ一連の戦乱が過ぎた後には、『歴史』が所有している軍事力、あれは放棄してもらふことになりますが」

ミルの言葉に、シルリーは何か冷たく重いものを飲み込んだような気分になった。この会談が始まった時、正直、条件さえ良ければ市庁側につくのもいいと思っていた。どうせ軍部と「歴史」が結ぶことはあり得ない。ならば市庁と共に軍部を打倒して今まで通りの地位を保つ方が、逆賊として戦うよりはよっぽどましだ。しかしオルケやイーアをはじめとする仲間たちを路頭に迷わせることになるとなれば話は別だった。

「……迷いますか？ 出会つて一ヶ月の人間は裏切れるけど、幼い頃からともに暮らしてきた仲間は裏切れませんか」

「そうじゃない」

どこか恨みごとのように聞こえるミルの言葉に、シルリーは少し声を大きくして応えた。

「幹部職などの一部の人間を除いて、『歴史』の軍事力は、学校教育も受けられないような貧しい人々を雇用して賄っているんです。俺が見捨てれば、彼らは他に生きる術を持たない。のたれ死ぬしかなくなるんです」

「わたしだって、あなたに拉致されていれば遅かれ早かれ処刑台の

露と消えていたでしょう。何も違いませんよ」

この辺りで、シルリーはミルの話がそれ始めていることに気がつき、ある種驚いたような、怪訝そうな表情で言った。

「ミル、あなたは何のために俺を呼んだんです？　俺を責め立てたかったんですか……？」

するとミルは我に返ったような顔になり、次第に俯いていった。

「ごめんなさい。ちょっと、感情的になっていたようです……」

「……何にせよ、返答は少し待って下さい。『歴史』の決定にはいつも会議を要します。後日使者を送りましょう」

それから数分にわたり、ミルは何も話さなかった。その表情は前髪に隠れて見えない。シルリーは困惑したのと、そもそもこの会談はミルが主導なので、黙ることしかできなかった。

「三月六日」

ようやくミルは言葉を発した。かすれたような声で。

「三月六日。市軍開戦の日です。奇襲攻撃も行わず、開戦の日時まで設定するとは、オッタスも変なところで律儀ですよ。まあ市民への被害が最小限で済むのでありがたいことですが」

「そんな情報を俺に伝えて、どうしろと言っんです？」

「別に。自由に使ってください。……あなたを呼んだ用件は以上です。もう帰ってもらって構いません」

腑に落ちないところはあったが、これ以上訊くこともないのでシルリーは席を立った。ミルに背を向けると、背後から足音が聞こえた。思わず振り返ると、腕にコートを抱いたミルがいた。コートは二月二〇日、シルリーがミルに貸したものだ。た。

「これ」

ミルはそれをシルリーの胸に押し付けてきた。シルリーは二、三歩退いて、それを受け取った。

「ありがとう」

「シルリー。良い返事を待ってる」

ミルは懇願するようにシルリーの顔を見上げて言った。シルリー

はミルに手を振って、部屋を後にした。

シルリーが建物を出ると、空は既に暗くなっていた。太陽の代わりに星が海を照らし、吹き抜ける風も冷たくなっていた。シルリーが気付くと、イーアが隣を歩いていた。しばらくはお互い、何も話さなかった。

「シルリー」

イーアの唇が動いたが声は波にかき消された。イーアはもう一度シルリーの名を呼んで言った。

「シルリー。どのみち、この戦乱の後街は変わる。わたしたちだつて、別の生き方を見つけれられると思う。だから、市庁の側についてら？ 歴史家を途絶えさせない方が大事なんですよ」

シルリーは黙っていた。いつしかオルケもシルリーの隣を歩いていた。

「市軍の争いは、多分市庁側が勝つだろうからな」

オルケは笑いながら言った。

シルリーは立ち止まった。イーアとオルケはしばらく進んで、シルリーの方を振り返った。

「あんたら、若いからって俺をあんまり見くびらないでくれ」

シルリーは一転、晴れやかな笑顔を浮かべた。

「『歴史』を潰すようなことはさせないし、軍部に好き勝手させるつもりもない。わざわざ市庁にゴマをする必要もないさ。俺たちは、今まで通りいくぞ」

それを聞いてイーアは心配そうな表情を浮かべたが、オルケは豪快に笑った。

「それは頼もしい。なら、帰ったら早速会議だ」

オルケはシルリーの肩を強く叩いた。シルリーは「痛い」と言いながら笑っていた。イーアの顔にもようやく穏やかな表情が表れた。

三月三日。

セマーヌ川に架かる、南北を繋ぐ橋が全て破壊された。

三月六日。

よく晴れた日だった。北部の人々は皆それぞれの家に閉じこもり、扉を固く閉ざしていた。恐らく南部に置いて同様だろう。鐘楼の鐘が鳴り続け、非常事態を告げている。街では犬一匹鳴いていない。街の北側、森の前にオッタスの軍勢が並んでいた。体格のいい馬に乗り、黒の重装備で固めている。対して二ー口の街では白い軍服を着た軽装備の軍人が北へと向かっていた。

オッタスは隊列の中心部に陣取って、馬上で指示を出していた。

「しかし、何故ここまで正々堂々と？ 恐れながら申し上げますが、あまり効率のいい方法とは思いません」

オッタスの傍らの男が言った。オッタスは前を向いたまま応えた。「戦争で軍人以外が死ぬべきではない。きっとフォードも同じ考えだろう」

現在時刻は午前八時半。午前九時に空砲の音を合図として開戦ということになっている。まだ少し、時間がある。

「元帥！ この男が何か急ぎで伝えたいことがあるそうです」

不意に兵士がオッタスのもとに一人の男を連れてきた。その男も黒の装備を纏っており、軍部の兵士であるようだった。

「こんな時に、何用だ」

オッタスは相変わらず前を向いたまま尋ねた。

次の瞬間、いくつか鈍い音がしたかと思うと、オッタスの周りの兵士八名が全てその場に崩れ落ちており、その中でただ一人立っている、今連れられてきた男がオッタスに拳銃を向けていた。

「動くな」

男はオッタスよりもむしろ周りの兵士に向かって言った。少しでも妙な動きをすればオッタスを打ち抜く、そういう意味だった。それでも男に銃口を向けた兵士はいたが、男とオッタスの距離は近く、下手をすれば銃弾がオッタスに当たってしまうので射撃は不可能だった。

「この兵士たちを即座に気絶させるとは、面白い体術を使うな」

余裕を失わないオッタスだったが、周りの兵士たちは戦慄していた。自分たちが瞬きしている間にオッタスの周りの全ての兵士が倒されていた。そして今、自分たちの総大将であるオッタスに拳銃が向けられていて、一歩間違えばその命が失われる。

「……『歴史』の者か」

オッタスがそう呟いた瞬間、男の拳銃は宙に舞っていた。兵士たちが気付いた時にはオッタスは馬を下りており、目にもとまらぬ速さで男を投げ飛ばした。そのまま自分の腰から拳銃を抜き、倒れている男の眉間につきつけた。

「その顔……貴様、確か、オルケシツハ」

オルケは顔を歪めた。今までなるべく「歴史」の人間だとは知られないように活動してきたつもりだったが、オッタスには知られていたらしい。もっともイーアと比べればオルケはかなり多くの方面に顔が割れていたのだが。

突如、炸裂音が響き、一帯は煙幕に包まれた。

——仲間がいたか。

オッタスはこの視界の中でオルケの姿を探すことはしなかった。

煙が晴れた時には、すでにオルケの姿は無くなっていた。

「総帥！ 大変です！ 総帥が刺客の手に倒れたという噂が広まっているらしく、前方の兵士たちが混乱しています！」

前方から駆けつけてきた兵士が叫んだ。オッタスは舌打ちをした。恐らく「歴史」の仕業だろう。実際自分は今刺客に狙われていたわけだし、今の炸裂音を耳にしたり煙幕を目にしたりした者がいれば、信じてしまっても不思議ではない。

「歴史」の本質は隠密行動にあった。純粋な兵力でいえば、軍部にもフォードの軍にも及ばないだろう。「歴史」は戦闘よりもむしろ拉致、暗殺、情報操作などを得意とした。今回の「オッタス＝テ」ン拉致計画」もそのような「歴史」の特性が背景にあった。

市軍開戦の混乱に乗り、オッタスを拉致し、軍部に対して政治的優位に立つ。その上で市庁を打倒し、歴史家主導で新政を行う。そんなシナリオの口火を切る計画だった。しかし二月二〇日事件と同じく、失敗した。オッタス自身があれほどの身体能力を有しているとは「歴史」の誰もが想像できなかった。とはいえ、この計画はある程度の影響も残した。

ミルは市長室で一人座っていた。ミルには軍事が分からない。戦場へパフォーマンスとして行くのも一つの方法かもしれないが、自分の場合は荷物になると判断してミルはここにいた。

鈴が鳴った。

「お入りください」

ミルが言つと、意外な男が入ってきた。風貌からして、市庁の役人ではなく、フォードの兵士だった。兵士であるならば、今は軍部との戦闘の中にいるはず。

「何故このようなところに？」

「ミル様。開戦は延期のようです」

驚いたミルが事情を訊くと、何やら軍部の方で原因不明の混乱が生じ、収拾がつかなくなったため、オッタスが兵を退いたらしい。

ミルはこの出来事の背後にシルリーの影を感じずにはいられなかった。結局、あれから「歴史」の使者が送られてくることはなかった。そして今、恐らく「歴史」は単独で軍部に対抗している。すなわち、「歴史」は市庁に下らなかった。

「シルリー」

ほとんど溜息だった。

第七話 「正義」

シルリーもさすがに苛立っていた。二〇日の失敗に重ね、オッタスの拉致さえ失敗してしまった。作戦を立てたのは自分である。一回目はフォードという予想していなかった勢力の介入に、二回目はオッタス自身の驚異的な身体能力に、それぞれ自分に対応できなかった。

——経験不足が祟ったということか。

十五で歴史家になったシルリーは、若さの割に仕事のミスも少なく、有能だと評価されていた。しかし平常時、軍事に携わることなどなかったわけで、そもそも文民である自分が軍事の指揮をするということ自体大分無理がある話なのだ。

そのようなことをオルケに話してみたところ、返ってきたのは意外な返答だった。

「お前は指導者としては俺より優秀だ。正直、手際の良さに驚いている」

それでは、一連の失敗の原因はどこにあるのか、と尋ねた。

「これは前から気になっていたんだが、ミル＝リラにせよ、オッタス＝テンにせよ何故拉致という手段を選んだ？ もつと言えば、何故暗殺に打って出ない？ 暗殺ならば作戦はもう少し単純化できるぞ。……思うに、お前は少し綺麗に勝とうとしすぎなのかもしれない。オッタスの拉致計画を六日に実行したのも、市軍の開戦を延期できたという思惑もあったのではないか？ 互いに潰しあってくれた方が助かるとはお前も言っていただろう」

随分と痛いところをつくな、と思った。オッタスはともかく、ミルを殺すなどシルリーにとって思いつきもしないことだった。重ねるが、シルリーには経験が少ない。人を殺すような指示を出したことはなかったのだ。

「すまない。言われてみれば確かに俺には無意識に殺人を避けてい

たところがあった。オツタスに関しては、拉致は不可能、そう考えていいんだな？」

「ああ。言い訳がましいようだが、あれは化け物だ。奴だってもう五十に近い歳だというのに、あの身体能力は人間離れしている。全く、馬鹿げた話だ。いかに綿密に計画を立てようとも、ターゲット一人の腕によって覆されるなど。まあ、不意をつかない限りは不可能だろう。しかし六日以降、当然あちらも警戒を強めているだろうが」

シルリーは考えていた。拉致は不可能。不意についての暗殺ならば可能性はある。しかしオツタス自身の屈強さもさることながら、今では彼を守る兵士をすり抜けることすら難しい。結局、なるべく護衛が薄くなったところを少人数で襲撃するしかない。

「分かった。俺も腹を決めよう。オルケ、これからしばらくのオツタスの行動予定を調べさせてくれ。暗殺に踏み切る」

まだ覚悟が決まった訳ではない。だがシルリーは相変わらず、行動してから感情がついてくる性格だ。自分の行動が正しかったかどうかなど、後で決める。

「ところでオルケ。もう一つ腑に落ちない点があるんだ」

「何だ」

「あれから五日が経ったのに、軍部は未だ何の動きも見せない。こちらは刺客だろうが軍隊だろうがいつ送られてきても迎え撃つ準備をしているというのに、何故」

「俺にも分からん。俺が若いころからオツタス＝テンは軍部にいるが、いまいち行動の読めない男だった。市への宣戦布告のことといい」

何か企みでもあるのか、とシルリーは考えたが、答えは出なかった。何にせよ軍部の方から攻撃を仕掛けてこないのは好都合だ。事態が静かなうちに出来ることはやってしまいたい。次の市軍の開戦は十八日だという情報が入っている。出来ればそれまでに終わらせたい。

数日経って、斥候から、十八日までのオッタスの予定と思われる情報もたらされた。シルリーはその中から襲撃に相応しい時間についてオルケと議論した。いかにオッタスが無防備な時でも――例えば演説の場など――、周りに人が多いのならば暗殺には向かない。南部でのオッタスの人気は相当なものだ。もし民衆の前でオッタスを殺してもしたら暴徒と化した彼らに襲われるかもしれない。結局、オッタスが自宅にいる時間が最適だということになった。自宅といっても警備兵は多く配置されているし、建物自体にも何らかの侵入対策がされていると見て間違いない。根拠はシルリー自身がそうしているからだ。とにかく、その厳重な警備をかくぐることができる少数精鋭の部隊を編成し、短時間で片付けるしかない。

「十六日に決行する。もちろん、それまでに向こうが何もしてこなければの話だけど」

シルリーはオルケをはじめとする部隊の人間に言った。部隊はオルケを含む四人にシルリー自身を加え構成されていた。

「足を引く張るなよ」

オルケはシルリーに向かって言った。シルリーは鼻で笑った。シルリーも、歴史家としての仕事をこなす一方で身体の鍛練は怠っていないかった。作戦に同行してその場で指示を出せるほどには訓練されているつもりだ。二〇日はシルリー自身が作戦をリードしていたし、六日もオルケを影で見守っていた。実戦は初めてではない。

「今回は、失敗して生き延びることは難しそうだ」

シルリーは部隊の者たちに厳しい声で言った。

「そのときは、何とかお前だけは生かそう」

オルケはそう応えた。

三月十六日。

オッタス・テンは自室のソファに座り、コーヒーを飲みながらテーブルの上の書類に目を通していた。その服装は普段とは異なり、貴族のように優雅なものだった。この部屋の中でオッタスは軍人と

いうより、気品のある紳士のように映った。部屋は広く、絢爛な装飾の施されたシャンデリアが全体を照らしていた。鎧などの軍事を連想させるものはなく、むしろ本棚などによって壁は埋め尽くされていた。窓はなく、暖炉で火がパチパチという音を立てて燃えていた。

ふと、火が弱まった気がした。最近は寒さも少し和らいできていたのだが、今日は夕方から雨が降り始め、二月に逆戻りしたような寒さだった。

先ほどから部屋のドアに人が近づく気配をオッタスは感じていた。使用人だろうか。いや、今もうドアを開ける音がした。使用人ならばノックもせずに部屋に入ってくるなどあり得ない。オッタスは強い警戒と共にドアの方向を睨んだ。

黒ずくめの少年がいた。よく知っている顔だった。十八の若さにして、歴史家として市庁に務めていた少年、シルリー・コランデュー！。

「お久しぶりです。オッタス・テン」

少年はドアから少し離れて立ち止まり、言った。

「警備兵は——俺がここにいる時点で言うまでもありませんが——必要な分は眠らせておきました。あまり叱らないでやってください。六日の件は失礼しました。あなた自身の能力を少々見くびっていたようです。お詫びに、俺自身があなたの命を奪いに参上しました」

シルリーは腰から短剣を抜いた。

と、思うよりも早く、シルリーはその首をオッタスの左手に掴まれていた。圧倒的な力で壁に押し付けられる。首を絞める力も強く、シルリーが両手で振りほどくとしてもびくともしない。このまま数分もすれば確実に絞め殺されるだろう。

「歴史家よ。貴様を殺す前に、一つ訊いておきたいことがある。：

…何故俺の命を狙う？」

その問いは、シルリーにとってあまりに意外なものだった。何故命を狙うのか。今更説明するまでもない。軍部はかつて「歴史」に

半ば脅迫に近い形で同盟を持ちかけ、その交渉は決裂した。もはや両勢力は手を取り合うことはないどころか、市庁を打倒した後には必ずや争うことになる。すなわち、敵対している。敵対している勢力の指導者の命を狙う理由を今更説明する必要などあるだろうか。

「勘違いしているような言っておくが、軍部は『歴史』とやりあう気はない。確かにロールロットは多少強引な手段で『歴史』との同盟関係を作ろうとした。だが、その目的はあくまで同盟だ。争う為に軍事力を動員したのではない。はっきり言って、今の軍部に市庁と『歴史』を同時に敵に回す力などない。我々はもともと利害を共にする。わざわざ争う必要はないはず」

オッタスの話を聞くにつれ、シルリーの表情はだんだんと焦ったものになっていった。全て合点がいった。そう考えれば軍部が『歴史』に今まで攻撃を仕掛けてこなかったのも当然のことだった。同盟交渉の決裂という事件に対する受け取り方の違いがこのようなすれ違いを生んだわけだ。結局、市庁にせよ軍部にせよ、『歴史』と争う気はなかったのだ。

ならば今自分がしていることはどうだろう。自分は、戦意のないそもそも戦う必要のなかった相手を一方的に攻撃し、殺害しようとしている。そんな自分に正義はあるのか。

「オルケ、殺すな」

薄れゆく意識の中でシルリーはその声を絞り出した。

オッタスの後ろではオルケが既に剣を振り上げていた。剣は止まることなく振り下ろされた。鈍い音と共に、オッタスは崩れ落ちた。血は流れなかった。

「すんでのところだ峰打ちにした」

オルケは息を切らせて言った。

今回の作戦では、シルリー自身が困だった。シルリーはいきなりオッタスを襲おうとしても気付かれると考え、一旦シルリーがわざと見つかり注意を集めることによって隙を作ろうとした。オッタスの部屋までのルートは他の三人が確保し、シルリーは堂々とドアか

ら、オルケは煙突を通って暖炉から侵入した。

「オッタスを運び出すことは出来るか？」

シルリーは喉をさすりながら尋ねた。

「俺が背負っていこう」

オルケはオッタスを持ちあげ、背負った。

煙突はオッタスを背負って脱出するには狭すぎたので、シルリーの来たルートを使うことにした。多少の危険はあるが、気を付ければ見つかりはしないはずだ。

その晩、シルリーはオッタスの拉致に成功した。

こうしてオッタスⅡテンの拉致が成功した。「歴史」と軍部の対立、そして市軍戦争の幕切れとしては、あまりにあっけなかった。オッタスを殺さなかった以上、これからシルリーがやるべきことは自ずと決まってくる。軍部のトップを捕虜としたわけだから、これを利用して街の南部を乗っ取ることもできよう。問題は民衆の支持をどう得るかだが、オッタス自身の協力を得て、ミルが行ったように南北対立に焦点をずらせばどうにかなるだろう。シルリーの仕事は南部運営へと移行していった。

三月十七日。

シルリーは石造りの地下道を歩いていた。右手にはパンと瓶入りの牛乳が握られている。そこは「歴史」が管理する、街の北東の外れにある建物の地下で、牢獄として使われており、オッタスはその内の一つに入れられていた。

「朝食です。オッタスⅡテン」

シルリーは、格子の隙間からパンと牛乳を牢の中に入れた。

「毒など入っていないので安心して食べてください。我々としてもあなたに死なれるのは困ります」

オッタスはシルリーがそう言うよりも前にパンに手をつけ始めていた。

「何故殺さなかった」

オッタスは食べながら尋ねた。

「さあ、何故でしょう。でも、今になって考えてみれば、あなたを生かしておいた方が色々と都合が良かったみたいですよ。あなたとは色々と話したいこともありますし、協力していただききたいこともある。この件に関しては後ほど」

シルリーが言っている間にオッタスはもう食べ終えていた。

「歴史家、こんなところに押し込められて、俺は退屈だ。少し話し相手になれ」

「は？」

オッタスの意外な言葉にシルリーは反応し損ねた。

「……まあ、いいでしょう」

この後すぐに予定があるわけでもなく、自分としてもオッタスと話しておきたいことがある。シルリーはオッタスの話に付き合うことにした。

「貴様の言う通り、『歴史』と同盟関係を築いて市庁を打倒したとして、その後はこちらが主導権を握るつもりだった。貴様が市庁側につく気がなかったのなら、軍部に攻撃を仕掛けたのは正しかったのかもしれない」

シルリーはその場に座りこんだ。オッタスは話を続けた。

「俺にしても、フォードにしても、そして恐らく、あのミル＝リラもそうなんだろうが、それぞれの正義の為に戦っている。その中、貴様だけが、自らの、『歴史』の地位を守るという、現実の為に戦っている。勘ぐるな。貴様を蔑んでいるわけではない。むしろ賞賛している。正義なんてものは、はっきりせず、訳の分からんものだ。貴様がそんなものの為に戦わないのは当然で、正常なことだ」

シルリーは黙って聞いていたが、ふと一つの疑問が浮かんだ。

「そういえばあなたとフォードは旧知の仲なんですよ。そんなあなたの言う、フォードの正義とは、具体的には？」

「まあそこが知りたいだろうな。俺を捕えた以上、軍部との戦いに関しては貴様の勝ちだ。これからは『歴史』が全面的に市庁と戦っ

ていくことになるだろう。そんな敵のことを知るのは、大事なことももしれん。……勝手に話したらあいつは怒るだろうが、それもまた面白い。聞きたいか？ フォードの正義とは何か」

シルリーは黙って頷いた。

「良い退屈しのぎになる。この話の主要人物はフォードⅡダングル、俺オッタスⅡテン、そして、クルーシャⅡポートルという少女だ。そうだな、どこか、あのミルⅡリラに似ていたかもしれん。まさに天使のような人だったよ」

そうしてオッタスは時を遡った。今から四十年近く前、街の南部が絶え間ない戦火に包まれていた頃に。

第八話 「フォード」ダングル」

これから語られる物語の主人公の名はフォード。フォード「ダングル」。二丁口の街を南北に分けるセマーヌ川の、南側のほとりに住む少年だ。南北の境に住むこの少年は、どちらの文化も柔軟に吸収してきた。ただフォードはあくまで南部の人間、他の皆がそうであるように、軍人に憧れていた。彼らは面倒見がよく、フォードら子どもたちとも度々遊んでくれた。子どもたちは当然のように軍人を志した。

しかしある時、南部で戦争が起こった。幼いフォードにはその戦争が何故引き起こされたのか分かるはずもなく、彼の両親は戦火の中に命を落とした。フォードは運よく生き延びたが、既に天涯孤獨、結局孤児院に引き取られることになった。孤児院の子どもたちは本来経済的な理由で学校には通えないのだが、かねてより神童と呼ばれるほどの優秀さを見せていたフォードは、特別に無償で学校に在籍することを許された。

彼が十歳になる頃には、戦争で荒廃した街も次第に活気を取り戻し始めていた。

ある日、学校でこんな宿題が出た。将来の夢についての作文だ。次の日、それぞれが書いてきた作文を皆の前で朗読することになった。

「僕の夢は、政治家になつて、二丁口を良い街にすることです」

フォードが自分の文を読み始めた時、彼は周りの空気が変わっていることに気が付いた。白い視線。いや、敵意すら混じっている。賢明な彼は、ほとんどの男子が軍人を目指す南部において、政治家になりたいなどという人間は異端なのだと理解した。しかし彼は毅然として朗読を続けた。読み終わると、まばらな拍手が響いた。

その日、フォードが孤児院に帰る途中、三人の子どもに行く手を阻まれた。同じ教室の男子だった。彼らは何も言わずに殴りかかっ

てきた。フォードは顔色も変えずに彼らの腕をかわし、逆にそれぞ
れの腹に拳を叩きつけた。

それから何度か同じようなことがあったが、フォードはその度に
返り討ちにした。力では敵わないと判断されたのか、続いて陰湿な
言葉を浴びせられるようになった。それでも反応がないので、その
うち子どもたちはフォードを無視するようになった。

何故自分がこんな目にあうのか、フォードは理解していた。南部
で政治家を志しているというのはもちろんのこと、自分は孤児であ
りながら無償で学校に通わせてもらっている。異端者を排する気持
ちと、嫉妬の感情が自分に向けられるのは当然のことだと思ってい
た。

誰にも相手にされなくなったフォードはいつしか、学校では常に
本を読んでいるようになった。

そんなある春の日。

「いつも本読んでるよね。どんなの読んでるの？」

フォードは最初、その言葉が自分に向けられていると気付かなか
った。この教室で、自分に話しかけてくる者などいるはずがないの
だから。十秒ほど経って、フォードはその少女を見た。

「邪魔しちゃったかな」

気遣うように話している少女の名を、フォードは知らなかった。
別の教室だろうか。

「僕？」

ようやくフォードは声を出した。

「何言ってるの」

少女は可笑しそうにして笑った。

「どんな本読んでるの」

少女は尋ねた。多分先ほども同じことを訊いていたのだな、と思
いながらフォードは本の表紙を見せた。「ピエロの旅」と書いてあ
る。

「童話？ 少し意外だな」

少女は興味深そうに本の表紙を見つめた。

「フォードっていうんだよね。あのさ」

「どうして話しかけるの」

フォードは少女の言葉を遮るように言った。少女は一瞬驚いたような表情を浮かべた。

「いや、どんな本読んでるのかわかって、気になったから」

「僕が無視されているのは知っているよね？ 何か企みでもあって話しかけてきたんだろ」

自分でも酷いことを言っているという自覚はあった。周りの子どもの輪から外れて暮らしているうちに、フォードは誰に対しても心を閉ざすようになった。仮に善意から近づいてくる相手であっても、冷たく突き放すようになった。

「わたし、企みなんて出来ないよ」

「……あまり僕と話していると、君もいじめられるよ」

フォードはそう言うのと再び本を読み始めた。それからしばらくして、ようやく少女はフォードの前から姿を消した。

夕方。フォードは孤児院に向かって歩いていった。孤児院は北部の子どもも受け入れているので、かつてのフォードの家と同じく川沿いに位置していた。

「フォード」

声に反応してフォードが振り返ると、昼間の少女が後ろから駆けてきた。フォードは眉をひそめた。

「家、こつちなんだ。実はわたしも川沿いに住んでいるんだ」

少女はそう言いながらフォードと並んで歩き始めた。

「孤児院だよ。場所は知っているだろ」

ひよっとしたら少女は、自分が孤児院暮らしであることも、政治家を目指していることも知らないのかもしれない。ならばそれを伝えれば、離れていくだろう。

「へえ。じゃあ、すごく頭いいんだ」

少女は何も気にしていない様子で、純粹な笑顔を浮かべた。フォ

ードにはますます意味が分からなくなった。

「何も企んでないなら、同情かい。無視されている僕を可哀そうだ
思っているのか」

「んー……。さっきからフォードはわたしが話しかけた理由をはつきりさせようとするけど、わたしが人に話しかけるのに特に理由はないというか」

その時、路地裏から十人ほどの少年が飛び出てきた。案の定、同じ教室の男子だった。何やら訳の分からない罵りを浴びせてきている。

——最近大人しくなったと思えば……。人数的には相手に出来ないこともないけど……。

相当の苦戦を強いられることは避けられなかった。

フォードがこれから起こる喧嘩のことを考えていると、背後で悲鳴が聞こえた。見ると、少女が二人の男子に腕を掴まれていた。

「人質だ、人質」

この無邪気な悪童たちは、本や劇で見たことの真似をしているだけだが、その行為はフォードにとってはなかなかの驚異だった。まさか少女に暴力を振るうというのだろうか。いや、やりかねない。

不意に、一番体格のいい男子に顔を殴られた。フォードは少しよろけたが、持ち直した。

「反撃とか、するなよ」

フォードは何もしなかった。自分のせいで関係のない人間に迷惑をかけるわけにはいかなかった。そうして、されるがままに数回殴られた。

「フォード。わたしは結構丈夫だからさ、そいつら倒しちゃってよ」
確かにこのまま何もしなければ事態は変わらない。しかし、自分の不幸が周りに撒き散らされるのは許せなかった。

そんな時、意外なことが起きた。少女の腕を掴んでいた二人が、尻もちをついて倒れていたのだ。そして少女の後ろから、一人の大柄な少年が表れた。

「全く、こんなものだから南部はガラが悪いと言われるんだ」

その姿を見るや否や、フォードを取り巻いていた男子たちの顔は青ざめ始めた。やがて一人が逃げ出すと、周りもそれに続いた。

「君は、ガキ大将みたいなものか」

フォードは少年に言った。少年の顔に見覚えはあった。同じ学校で、リーダー格のような雰囲気醸し出していた印象がある。

「そんなところだ」

少年は無表情に応えた。

そのとき、川沿いにはフォードと、その少年と、少女がいた。それぞれ今日初めてまともに話し、まだお互いのことを知らなかった。 「ありがとう。えっと……」

フォードは珍しく素直に礼を言った。

「オッタスだ」

大柄な少年は応えた。

「同じく、ありがとう。そういえばまだフォードにも自己紹介をしていなかったね。わたしの名前はクルーシャ」

これが、フォード「ダングル、クルーシャ」「ポートル、オッタス

」「テン、後々まで深い親交を続ける三人が初めて会った時だった。

クルーシャはいたって平凡な家庭の娘で、オッタスは著名な軍人の息子ということだった。後で聞いたところによると、クルーシャがフォードに話しかけてきたことに結局理由はなく、オッタスがフォードたちを助けたのは街で喧嘩が起こるのが嫌だったかららしい。そしてオッタスもまた、川沿いに住んでいるとのことだった。

フォードは先にオッタスに心を開いた。オッタスも周りの子どもから恐れられているものの、どこか距離を置かれ孤独だったらしい。そのうちオッタスとクルーシャの仲が良くなると、フォードとクルーシャも次第に親密になってきた。やはりクルーシャはフォードと関わったことで少し無視されがちになった。しかしオッタスの眼もあってか、フォード同様表立って嫌がらせを受けることはなくなった。フォードはクルーシャを案じたが、クルーシャは気にしていな

いと言いつけた。ただ、三人が周りに馴染めないのには変わりがなく、閉じた関係だった。

彼らは十一歳になるとそれまでの学校を卒業した。フォードとクルーシャは高等学校へ、オッタスは軍事専門学校へと進んだ。高等学校には軍人の道を選ばなかった者が集まるので、フォードはそこで無視されることはなかった。学費にしても新聞配達などで、自分で稼いだので、その点でも疎まれることはなくなった。フォードとオッタスは、学校は違っても、川沿いの道をよく二人で歩いた。幼い彼らが語るのは、だいたい理想の街についてだった。

「今更聞くけど、フォードはどうして政治家になんかなろうと思っているんだ？」

ある日オッタスは尋ねた。南部に生まれながら政治家の道を進むというのが茨の道であることなど、どんなに小さい子どもでも知っていること。それなのに敢えてその道を行こうとするフォードの姿は、オッタスの眼にも多少奇異に映った。

「僕は、軍事だけでは大切なものを守れないと思う」

フォードは淡々と、しかし強い意志を持った声で応えた。

「戦争、憶えているだろ」

フォードは続ける。

「知つての通り、あの戦争で僕は両親を亡くした。いつも一緒に遊んでくれた近所の軍人たちも、何人も死んでいった。何かを守るのに、軍事だけでは無力だと思った」

オッタスは頷きもせずフォードの話を聞いていた。そしてやがてぽつんと言った。

「戦争なんかなければいいのにな」

オッタスの言葉はフォードにとって意外なものだった。軍人というのは戦争を仕事としているものだと思っていたから。

「じゃあ、フォード。こうしよう。俺は軍部のトップになるから、お前は市長になれ」

これにはさすがにフォードも苦笑した。

「市長つて。南部出身の市長なんか聞いたこともない」

「いや、お前ならなれる。俺が保証する」

「……そうかい。なら、なれるのかもしれない」

「そうして、二人で、二ー口をいい街にするぞ」

オッタスはフォードに向かって拳を突き出した。

「約束だな」

フォードはそう言い笑うと、オッタスの拳に自分の拳を合わせた。時は流れ、十五歳になった時、フォードたちはそれぞれの学校を卒業することになった。オッタスは軍部に入り、クルーシヤは親の店を手伝うことになった。そしてフォードは、北部の大学に進学した。

フォードが大学に通い始めてから一年、彼らが十六歳の時、フォードはクルーシヤに一つの提案をした。

「今年の大晦日は、北部で過ごさないか」

これにはさすがのクルーシヤも戸惑った。いくらクルーシヤが気丈とはいえ、すすんで北部に出かける気にはならない。しかしフォードは引かなかった。南部の人間だとばれないように服も調達する、絶対に危険な目には遭わせない、と。それならオッタスも誘おう、とクルーシヤは言ったが、オッタスは用事があるという。結局クルーシヤはフォードに連れられて、大晦日の夜を北部で過ごすことになった。

北部の大晦日から新年にかけては、盛大な祭りが行われた。街はオルガンや笛、ギターなどの様々な音楽で溢れ、鐘楼の鐘は絶え間なく鳴り続けた。そして、空から淡い光を帯びた木の葉が降ってきた。

「これは？」

クルーシヤは一枚の葉を拾い、尋ねた。

「あそこから撒いているんだよ」

フォードは鐘楼を指した。北部では秋のうちに落ち葉を集め保存しておき、暗い中で光る特殊な塗料をつけて、大晦日の夜にそれを

鐘楼から風に乗せるといふ風習があつた。鐘楼はかなりの高さを持つているので、葉はかなり遠くまで届き、街を蛭が飛びまわっているようだった。

「すごく綺麗」

思わずクルーシャの顔からも笑みがこぼれた。

「ちなみに、この葉っぱを撒くのは市長の役目なのさ」

そうして二人は街の色々な場所を巡った。商店はほとんど営業しており、二人は飲食店に寄ったり、アクセサリを見たりした。最初は不安な表情を浮かべていたクルーシャも楽しめているようだった。

そうして、零時、新年が近付いた。鐘はけたたましいほどに鳴り続けていた。

二人は、市庁舎前の広場に設置されているベンチに座っていた。

「クルーシャ」

「何」

「すまない」

「本当に何、いきなり」

クルーシャは困惑したように笑った。

「皆の輪から外されていた僕に話しかけて、ずっと一緒にいてくれた。でもそのせいで君の交友関係はだいぶ狭いものになってしまっただろう」

「まあ、そうかもね。でも」

クルーシャは俯いた。「でも」と言葉を切っておきながら、かなり長い間黙っていた。やがてクルーシャは顔を上げてフォードの眼を見た。

「言った通り、わたしがフォードに話しかけたのは、本当になんともなかったんだよ。だけど話してみるとすごく優しくて、楽しい人だって分かった。フォードは謝るけど、わたしが好きでフォードの傍にいたの。だから気にしないで。だって……」

「それから先は言っな」

「え？」

「今日くらい、いい格好させてくれ」

そのとき、あちこちで新年を祝う声が上がった。

フォードは十八歳になり、大学を卒業した後市庁に入った。

その年の夏の日の夕暮れ、フォードとクルーシャは川沿いのいつもの道を歩いていた。

「それにしても、フォードとオッタスは本当に仲がいいね。少し妬けちゃうくらい」

「気色悪いことを言うな。喧嘩だつてしょっちゅうする」

「それで決着がつかなくて、いつも二人ともボロボロになってた」
クルーシャは愉快そうに笑う。

「クルーシャ。僕はよく、『軍事だけでは大切なものを守れない』
つて言うだろう」

不意に、フォードの声が低くなった。

「うん、だからオッタスと協力していい街を作るって」

「あれ、嘘なんだ」

フォードは立ち止まった。

「え？」

「本当は、『軍事では何も守れない』、そう思っている」

「それって……」

「いつか、あいつと本当の大喧嘩をする日があるかもしれない」
フォードはそう言つて笑った。夕日に映えるその笑顔は、クルー

シャも見たことのないような、すがすがしいものだつた。

「そんなの駄目だよ。二人が本気で喧嘩したら街が壊れちゃう」

二人とも笑った。

「そうだ。ところでクルーシャ」

「ん？」

「僕はいずれ北部に移り住もうと思っている」

クルーシャの顔が一転、寂しげなものになった。

「そうか。じゃあ、ちよつとお別れに近くなるのかな」

「いや。結構先の話さ。僕が市庁である程度の給料をもらえるようになったら。家を買おうと思っている。だから、その時は、そこで一緒に暮らそう」

クルーシャは満面の笑みを浮かべた。

「うん」

一方オッタスは着実に軍部でその地位を築いていった。フォードの知らないところで妻を得たらしい。フォードもその有能さから順調な昇進を続け、予定通り北部に家を買ひ、クルーシャと二人でそこに移り住んだ。三人の生活は、順風満帆のように思われた。

ただ、南部出身のフォードの成功を良く思わない者が市庁にいることも確かだった。市庁は基本的に実力主義だから、フォードの出身が彼の成功を妨げることはなかった。しかし個々人の感情となれば話は別である。厭味を言ってきたり、嫌がらせをしてきたりする者もいた。だがフォードとしてはあまり気にしていなかった。

長い歳月が流れ、それぞれが三十に近くなる頃だった。フォードは久しぶりに南部に赴くことになった。目的地は、オッタスの家である。

フォードが玄関に着くと、上機嫌のオッタスが迎えた。

「おめでとう」

フォードが花束を渡し、二人は握手をした。

オッタスに娘が生まれたのだ。

フォードが一通りの祝福をした後、二人は夕食を共にすることになった。

「どうだ、最近」

フォードはグラスにワインを注ぎながら尋ねた。

「順調よ。可愛い娘も授かったことだし、軍部でもじきにトップを任されそうだ」

オッタスは幸せそうにステーキを切り分けていた。

「わたしもそろそろ子どもが欲しいものだな」

「ああ、そういえばクルーシャは来ないのか」

「誘ったんだが、何か遠慮しているらしい。また機会を改めて挨拶に来るそうだ。わたしもお前ほどではないが、市庁ではなかなか上手くやっていけているよ。歴史家にも気に入ってもらえているらしく、また重要なポストを任せられるかもしれん」

「いいことだな。ただ、お前、気を付けろよ」

オッタスがナイフを置いた。少し、深刻そうな表情になった。
「気を付けるとは？」

「俺が軍部で成功しているのは、こう言っただけだが、当然だ。南部の人間が南部に勤めているのだから。しかしお前の場合、お前の快調ぶりを良く思わない奴もいるだろう。人の嫉妬というのは恐ろしいぞ」

「ああ、それなら大丈夫だ。確かに嫌がらせのようなものはたまに受けるが、幼稚なもので全く気にならん」

「だいたい」

しかしオッタスの予感、不幸にも的中することになる。

ある日の夜、フォードが市庁から自宅に帰る途中——野暮用でいつもより遅くなった——、やけに街が騒がしかった。軍部の人間が走り回り、何か事件でもあったようだった。フォードは通行人の一人を捕まえて、何があったのか尋ねた。

「向こうの家が火事らしいぜ」

それを聞き、フォードの背筋は凍りついた。数秒唖然としていたが、すぐにわき目もふらずに走り始めた。通行人が指したのは、自分の家の方角だ。走っている途中、オッタスとの会話が頭をよぎった。

——人の嫉妬というのは恐ろしいぞ。

残酷なことに、暗闇の中で橙色の炎に包まれているのはフォードの家だった。それも、中に妻クルーシャを残した。軍部が出動し、消火に当たっていたが炎は治まることを知らない。

フォードはよろめいた。現実を確認するのに時間がかかった。そして気が付けば身体が動き出していた。炎の中へと。しかしそれを

制止する手があった。消火に駆けつけていたオッタスだった。

「放せ」

フォードは泣き叫んでオッタスの手を振りほどこうとした。しかしオッタスは放さなかった。

「馬鹿野郎。お前が火の中に飛び込んでどうする」

「放せ」

やがて火は消えた。しかしフォードのもとには、妻の死という知らせが届いた。フォードはその場に泣き崩れ、やがてオッタスの胸倉を掴んで叫んだ。

「何故止めた。クルーシヤを救えずに生き延びるくらいなら、炎の中で死んだ方がましだった」

瞬間、オッタスの拳がフォードの身体を吹き飛ばした。

「ふざけるな。自分の言っていたことを思い出してみろ。お前は、政治で人を救うんだろが。勝手に死んでどうする」

そう言うオッタス自身、目には涙を浮かべていた。

それからフォードは変わった。今まで政局といったものを意識していなかった彼も、積極的に政敵を排除するようになった。もはや市庁で自らの地位を築くのに手段は選ばなかった。そしてついに、市長に上りつめた。彼はそのカリスマと、手段は選ばないが必ず結果は出すという手腕で民衆から絶大な支持を得た。

こうして、世間の知るフォード「ダングル」テクマが歴史の表舞台に姿を現すことになった。

第九話 「第二王政」

「フォードはいつもペンダントを身につけているだろう。あれにはクルーシャの写真が収まっているのさ」

オッタスの話を聞き終えて、シルリーはどっと疲れた気がした。思わずため息が漏れる。もう床に腰を下ろしてしまっていたが、立ち上がり、肩を回した。

「よく分かりました。貴重なお話、感謝します。しかし、随分と大人しいんですね。自分を捕虜とした敵を目の前にして」

シルリーの言葉に、オッタスは笑った。

「貴様が俺を殺さないことも、俺の部下たちを冷遇しないことも知っているからな」

「ええ、確かにその通りです」

結果的に「歴史」のやったことは奇襲だ。ここで仮にオッタス一人を殺したとしても、逆に軍部や市民の反感を買っただけだろう。「歴史」を構成する人数は少ない。出来ることならば軍部をそのまま傘下に入りたい。その為にはオッタスは殺さず、取引の材料として扱うのが最良の手だった。またその部下も、人材として重宝することになるので冷遇はできない。

——しかし。

オッタスの話を聞き、シルリーの中で何かが揺らぎ始めていた。オッタスは、正義の為に戦うことは馬鹿げていると言った。しかし、平和を熱望するフォードの正義はたいへん立派なものに思えたし、自らの地位だけを考えて戦う自分は浅ましく見えた。いや、オッタスにせよ、恐らくミルにせよ、この街の未来の為に戦っている。その勢力図の中で自分のことだけを考えているシルリーは、歴史的には邪魔者となっているのではないだろうか。

シルリーは建物の一階に上がった。市庁との間に表立った対立はないとはいえ、街を堂々と歩くわけにもいかない。しばらくは、こ

これを拠点として活動していくことになりそうだった。

少して、イーアが戻ってきた。例のごとく街の偵察を任されていたイーアは、新聞と、一枚のパンフレットを持ってきた。

「これは？」

「近いうちに、ミル＝リラ女王即位の市民投票が行われるみたい。もちろん、北部のみで。恐らく彼女は過半数票を集めるでしょう。就任当時の賛否両論はどこへやら、今ではすっかり市民の人気者だから。そうしたら、名実ともにこの街は分裂する。北部はミル＝リラ朝という別の行政地区になる」

シルリーはパンフレットを手に取った。表面には市民投票についての事務的なことが、裏面にはミルの言葉が書かれていた。飾り文字で「神話」と題されている。

『神話の時代、

世界がまだ広がった頃。

わたしたちの眼に移る光景はもう少し鮮やかだったのだろう。

彩りは他の光と交わって、

時に調和し、時に排し合った。

戦争はわたしたちの知っているものとは違い、

軍人の仕事ではなく、子どもまで狩りだされる総力戦で、

住宅街に砲弾が降り注ぎ、森林は枯れ果て、

人は政治の為だけに争うのではなく、

自らの文化や、肌の色や、信じる神の為に、

他者を殺した。

今、わたしたちは狭い世界を生きている。

同じ街に住み、

同じ文化を持ち、

同じ肌の色をし、

同じ神を信じている。

神話の時代、理想に過ぎなかった言葉が、
現実味を帯びてくる。

——恒久的な平和——

その為には強大な力が必要だ。

街の為に尽くし命を捧げる誰かが必要だ。

歴史がそのような人間を生み出さないのならば、
自らが王となるっ」

シルリーはミルの就任演説を聞いたときと同じような感覚に陥った。そもそも、「ミル」リラ朝」という呼称自体、神話じみている。それは「国」が一つの王家によって統一されていることを示す言葉だ。だがここは「国」ではなく、「街」だ。ミルはこのように、何かにつけて神話を持ちだしたがるように思えた。世界がまだ広がった頃、分裂前の世界を。

「相変わらず、言うことが壮大だな。ミルは」

「シルリー。わたしたちはこれからどうするの？ オッタスを殺すわけにもいかなかったのなら……」

「北に統一王朝が出来ようとしている。もはや俺たちの帰るところはないだろう。ならば、こちらも南部を統一しないと潰されるのは時間の問題だろう。少し前から、南部にはオッタスを大統領として独立しようとする動きがあった。それを利用すればいい。すなわち、オッタスを取引材料として、軍部とは『歴史』優勢のまま和解する。そして、軍部が俺を宰相として受け入れたという形で、南部を統一しよう。あくまで全権は俺だ」

「そんなことが可能なの？」

「オッタスも思ったより話が分かりそうだ。何とかなるだろう」

三月十七日はここ最近のシルリーにとって最も忙しい一日となっ

た。軍部と交渉し、同時に北部にも使者を飛ばした。決定された事項は以下のことである。

・軍部と「歴史」は互いに危害を加えないことを誓い、ここに和解する

・軍部は歴史家シルリー・コランデューを政治参謀として採用する

・軍部は最高決定に関して歴史家の優越を認める

・十八日における市庁と軍部の戦闘は中止とする

市庁側が戦闘の中止を認めたのはシルリーにとって意外なことであり、幸運なことでもあった。ともあれ、シルリーは南部の体制を立て直すだけの時間を得た。これらの決定は上層部間のみで下されたものであるので、市民に受け容れさせるのはまた別問題だ。まずはもともと北部の人間である歴史家が南部のトップに立つことへの許しを得て、南部としての統一を目指さなければならぬ。

その晩、シルリーは久々に学者としての仕事をしていた。「期間」の研究である。人々が一定の期間の記憶を失ったのではないかと思われる場面が歴史書には少なからず見られる。例えばある年に関する二つの異なる記述が存在したり、ある建物がいきなり半壊していたという記述があったりする。そしてそのような現象は、——ミルは数百年に一度と言ったが——ある数列を成す周期をもつて起きるのではないかという予想がコランデューの中では立っていた。

何故この研究をこんな時期に再開したかという点、ミルがかつて言った、「期間」は既に始まっているという言葉が気にかかっていたからだ。あの時はあまり気にしなかったが、今となってみればミルはあの時点でこの騒動を起こす意図を持っていたということになる。仮に「期間」が始まっているのだとすれば、一連の騒乱は何の意味も持たない。人々はいずれそのことを忘れてしまうのだから。それを知りながらあのような行動を起こすのはどういう目的からなのか。それが不可解だった。

そしてミルに関して不明な点がもう一つあった。ミルとフォードはどんな関係なのか、ということである。ミルは、親が市庁に勤め

ていた、と答えた。しかしここ最近の記録を見ても、リラという家の人間が市庁にいたという記述はない。親とファミリーネームが違っているという可能性もあるだろう。しかし何にせよ、ミル＝リラという人間の出自に関して分らないことは多い。フォードも自分の出自を明かすのを嫌ったが、ミルは市長就任後もほとんどプロフィールを公開していない。市庁との対立が決定的となった今となつてはいずれも調べようのないことなのだが。

机に向かうシルリーがふと窓の外を見ると、月が不自然に明るく輝いていた。

五九二年 五月二日 ミル＝リラが女王として即位

五九二年 五月七日 オッタス＝テンを大統領として、共和政南
ニールが成立

五月二日は暖かく、良く晴れた日だった。落葉樹にはすっかり葉が戻り、足元には春の花が咲いた。白い鳩が太陽を目指して飛び、この日を祝福しているようだった。市庁舎のセレモニーベルはゆっくりとした時を刻み、人々はセレモニーホールに集まった。

サンは最前列の席に座つて、女王の登場を待っていた。意外だったのはここに自分が座れたことである。普通は市庁の重役だとか、そういった人間の指定席となつていそうなものだが。

こんな中で気になるのはシルリーのことだった。報道によると、歴史家は南部についたらしい。その理由はよく分からなかった。シルリーは日頃から軍部を嫌っている様子を見せていたし、彼が市庁を離れるメリットもない。あれから一度シルリーの自宅を訪ねたが、やはりもぬけの殻だった。恐らく南部に居を移したのだろう。軍部としても、何故掌を返すように歴史家に下つたのだろうか。公開されている情報からは、とても辻褄の合う説明は紡ぎだせなかった。

この件に関して、サンは自分自身が悲しいというよりは、シルリーに同情的だった。シルリー＝コランデューという人間は幼いころ

から家に囚われてきた。まとも一般の学校にも通わず、周りよりもずっと進んだことを学ぶ彼に同世代の友人など多いはずもなく、サンや「歴史」の人間とばかり遊んでいた。庶民的な幸せを許されなかったのが彼なのだ。そして十五の若さで歴史家となり、十八にして歴史的な騒動に巻き込まれた。シルリーのことだ、淡々と果たすべき行動をしているだろう。彼と少しでも親しかった人間なら分かることだが、シルリーの決断力と行動力は彼の感情に先行する。感じる暇もなしに彼は自ら争乱の渦中に入ってゆく。気が付いた時には彼を囲む状況は豹変している。

——なんてことにならなければいいんだけど。

サンの瞳は幼馴染を案じ憂鬱だった。

しばらくして、サンは鐘が鳴り止んだことに気が付いた。ミル・リラ入場の合図だ。最近の彼女の服が王族じみたものになっていることには皆気付いていたが、今日のそれはまさしく女王の衣装だった。穢れを寄せ付けぬ神聖なものとしての白色。

続いて壇上に一人の男が現れた。驚くべきことに、その服装は庶民のものであった。その両手には冠が抱かれている。一庶民が、女王に冠を与えるというのだろうか。会場は一段と緊張した。

不意に、オルガンが鳴り始めた。その旋律は、誰もが知っている、創世を歌う童謡だった。それに呼応するように男はミル・リラの前に立ち、ミル・リラは跪いた。男はゆっくりとした動きで少女の頭に冠を載せ、少女は目を閉じながらそれを受け取った。やがてミル・リラが立ち上がると、男は壇上から去っていった。それと同時に音楽は終わった。

「わたくしの戴冠を行った方は、抽選で選ばれた北部の市民です。まずは、わたくしの即位を認めて下さった市民の皆さまに、心よりの感謝を申し上げます。王制を開始するにあたって、わたくしは皆さまと共にあり、あくまで二一〇の第一市民であるということを強調するために、誠に勝手ながらこのような趣の式とさせていただきます」

第一市民。これも神話に出てくる言葉だ。かつて、ある尊厳者はその行為が独裁ではないと示す意味で、自らをそのように呼んだのだという。もつとも、彼が民主主義者だったというよりは、独裁者として警戒されないう意味が強かったそうだが。

「皆さまがわたくしという君主の誕生を承認して下さったことから見て、この北二一口の市民ひとりひとりが現在の状況に少なからぬ危機感を抱いていることが伺えます。二月二〇日に始まる軍部のクーデター。今や軍部は歴史家と手を結び、南部に新たな街を築こうとしています。ご承知の通り、北部と南部では産業構造も社会体制も地理も異なっています。この二つの地域が分断されて、世の中が回っていくとは到底思えません。皆さまが王としてのわたくしに求めることは、南北二一口の統一、それもかつてない程の強固な力で違うでしょうか」

瞬間、ホールは歓声に包まれた。

サンはその熱狂の中で、恐怖に近い感情を抱いていた。

——宗教じみている。

ミル・リラの担がれ方を、そう思った。

自分は何も特別なところがない一般的な学生だ。サンはそう思っていた。そんな自分が人と大きく違ふところがあるとすれば、それは歴史家を友人に持っていること。それがこの王政開始について周囲とは異なつた感想を抱かせるのだろうか。

誰も指摘しないが、ミル・リラの行いは、その言葉とは裏腹に随分と暴力的だ。二月九日の平和会議から彼女は大規模な再構築を開始したという。しかしそれが大きく報道に取り上げられることはない。そして二〇日の軍部のクーデター。これは再構築に対する反発と捉えるのが本来妥当だろう。しかしミル・リラは軍部の野心によるものだと決めつけ、南北の分断を誘導し、南部を共通の敵としたところで高まつた結束力を利用して自らを王にまで持ち上げた。

彼女は平和を目指していると言っているが、実際、彼女自身ですんで戦争を起こそうとしているではないか。

そして、ミル・リラという人間は何かにつけて象徴的だ。十六歳の少女にして市の長。彼女が語る神話的世界観。共和政から王政への移行という歴史的な事件。そして今日の、第一市民を自称する戴冠式。まるで人気の高いキャラクターを作り上げようとしているかのよう。サンが宗教じみていると思っただのはその点だ。

緊急時、指導者に求められるのは能力よりもむしろカリスマだ。それこそが独裁者としての資質。ミル・リラは自分自身をカリスマ性のあるキャラクターに仕立て上げ、その上で自作自演の非常事態を作り、民衆から絶大な人気を得た。そう思えてならない。

——こんなことを言っても、誰にも相手にされないだろうけど。むしろ変人扱いか。

この、ミル・リラが始めた王政を、古の王が行ったそれと区別して第二王政と呼んだ。

五月七日。この日もよく晴れており、五月にしては気温が高かった。

南部中央に位置する公園で演説が行われた。話し手はもちろんオッタス・テン。そしてその傍らには歴史家のシルリー・コランデューがいた。北部の人間の登場に民衆は驚きを隠せなかったが、市庁に迫害を受けた北部からの亡命者を手厚く迎えるというオッタスの意向を聞いて皆一応は受け容れた。意思決定の実権は既にその歴史家に握られているとは知る由もなく。

そしてオッタスは南部の独立を宣言した。

かくして、ミル・リラ朝ニール、共和政南ニールという二つの市が誕生した。ニール口の街が正式に二つ以上に分かれたのは歴史上はじめてのことであった。

第十話 「冷戦」

五九二年 六月一日 南北首脳会談の開催

「どういうこと」

馬車に乗り込もうとするシルリーのもとに駆けつけてきたのはロールロット・テン。オッタスの娘だった。シルリーは若干迷惑そうな顔をして馬車から下りた。

「もう出発する。言いたいことがあるなら手短にしろ」

「軍部の人間を連れていけないのはどういうことだって言っているの」

ロールロットは今にもシルリーに掴みかかりそうな剣幕だった。南部の独立以来、シルリーは大半の軍部出身者を懐柔したかのように思えた。しかし、このロールロットだけは何かにつけてシルリーに突っかかってきたのだ。

シルリーは溜息をついた。

「文句があるならお前が来ればいい。俺の護衛として置いてやる」それを聞いてロールロットは更に怒りの表情を強めたが、ふと冷静な様子に戻り、馬車に近づいた。

「そうさせてもらっわ」

こうして馬車は北に向かって走り始めた。シルリーとロールロットの他に、オルケを始めとする「歴史」の人間数人を乗せて。

二ー口の分裂後初めての南北会談が今日開かれる。場所は、今は名を北二ー口宮殿と変えた、旧二ー口市庁舎。北の全権はミル女王、南はシルリー・コランデュー。

「お前は俺を恨んでいるようだが」

シルリーは、目線は窓の外に投げながら、ロールロットに言った。「先に暴力的な手段に出たのはお前だからな」

するとロールロットは嘲笑うような表情を浮かべた。

「別にそういった、どっちが先に仕掛けたとか、ことの善悪だとか、そういう話はしていないわ。わたしは、歴史家に南部の実権を握られているのが気に入らないだけ」

「……そうか。そうだよな」

奇妙なことにシルリーの声音はある種安心したような色合いを帯びていた。

「オルケ。このロールロットという女は隙を見せれば俺を殺すかもしれない」

シルリーは傍らのオルケに言った。

「そう思うなら、どうして同行を許可したの？」

ロールロットは不機嫌そうに言う。

「俺だって、いつまでも軍部と対立してたくはないんだ。そのために出来る限りお前の要求も聞いてやっている。それに、周りを『歴史』に囲まれている状況でお前は何も出来ないだろう」

ロールロットは言葉を返さなかった。

「ようこそ。歓迎いたします。南二ー口の方々」

女王が直々にシルリーたちを迎えた。ほぼ対立状態にあるとはいえ、相手は北部を治める王。シルリー以外の人間は跪いて挨拶を述べた。

ミルに案内され着いたのは広めの会議室だった。テーブルが運び込まれ、多少の料理が用意されている。シルリーにとっては見慣れた風景だったが。

「皆さま、遠路お疲れになったことでしょうか、少しお休みください。わたくしは最初に歴史家の方と話すことがあるので」

ミルはオルケら南側の使者たちを席に着かせた。

「シルリー」

オルケが注意を促すように言った。

「案ずることはない。女王自身が護衛もなしにわたしと話したいと仰っている。少し待っている」

シルリーは上着を脱いでオルケに渡した。武器を所持していないことを示すためだ。

「市長室へ」

ミルはそう言つて会議室から出た。シルリーもその後を追った。市長室の前。シルリーはかつてのように鈴を鳴らした。

「着替えているので少し待つて下さい」

中からそんな声が聞こえてきた。しばらくしてミルの方からドアを開けてきた。シルリーは招かれるままに部屋の中に入っていった。「職務とはいえ、あの格好で過ごすのは疲れます」

椅子に座っているミルの服装は、かつてシルリーと街を回ったときのように庶民じみたものになっていた。確かにあの王としての衣装は少々重苦しそうだった。

シルリーは、緊張していないといえば嘘になる。自分は以前、仲間になつてほしいというミルの申し出を無視した。あれから会つのはこれが初めてなのだ。

「結構寂しかったんですよ」

ミルは苦い微笑みを浮かべていった。

「出来ればあなたとはこんな形で会いたくはありませんでした。本当に、どうしてわたしたちが会う場所は、このような窓のない部屋なのでしょうね」

ミルは冗談めかしているが、そこには本物の憂鬱が込められていた。シルリーも何か応えなくなつたが、努めて言葉を発しないようにしていた。

「でも、こうして会談が実現したのは幸せなことですね」

「ミル」

シルリーがようやく言葉を発した。ミルは一瞬安堵したような表情を見せたが、すぐにそれを隠した。

「あなたは何者ですか」

この質問にミルは最初驚いたようだったが、やがて落ち着いた笑顔顔を浮かべた。

「いいよ。答えても」

「なら、是非教えて頂きたい」

すると、ミルは椅子から立ち上がった。こうして並ぶと、シルリーとの身長差が際立って見える。それでもなおシルリーにとってミルは、不可解で、とらえようのない、どこか不思議な存在だった。

「わたしが二ー口の外から来たと言って、信じますか」

シルリーは一瞬目を開いたが、その表情はすぐに怪訝そうなものになった。

「いいえ。そもそも二ー口の外などありません」

「そう。ならもう話すことはないね」

ミルはからかうような調子で言い、再び椅子に腰を下ろした。

「……分かりました。その『外』があるとしましよう。続きを話してください」

シルリーが観念したように言うと、ミルは再び微笑んだ。

「だって、『歴史』も神話についてはある程度事実だと認めているのでしょう?」

「確かに、この世界がもっと大きい世界から分化したという話には現実的な根拠があります」

「それ。その『もっと大きい世界』、わたしはそこから来たんです」
そう言うと、ミルの眼はどこか遠くを見始めた。微笑みは憂愁へと変わった。

「わたしの女王即位の市民投票のときのパンフレットは読みましたか?」

「ええ。神話というやつですよ」

「あそこにだいたいのことは書きました」

シルリーはパンフレットの内容を思い出し、書いてあった言葉を一つずつ拾っていった。世界がまだ広がった頃。戦争は——総力戦で——政治のためだけに争うのではなく——人を殺した。

「あなた方には想像もつかないでしょう。わたしが経験したのは何十という国家同士の戦争です。わたしにも何人かの家族がいました

が、皆戦火の中に消えていきました。最後に残されたわたしは、どこへともなく逃げ回って、もうあの世界に未練もなく、気が付いたら二一〇にいました。当然この世界に身寄りもない。そんなわたしを拾ってくれたのが、フォード様でした。世間には知られないようにしていましたが、実質の養子として育てて頂きました。そして今年の三月、わたしは世に出ることになったということです。こんなところでいいでしょうか」

ミルの話はにわかには信じ難かった。しかしそれを認めれば、ミルの出自がはつきりしないこと、フォードとミルの関係、ミルの言葉に見受けられる妙な壮大などが全て納得のいくように思われた。「ありがとうございます、と言いたところですが、信じるかどうかは保留にしておきます」

「ひどいな」

ミルは笑った。

「ただ……、その話が本当なら」

シルリーは横目にミルの顔を見た。

「相当、心細かったんでしょうね」

その言葉に、ミルの表情に初めて隙ができた気がした。

「思えば、俺と初めて逢ったあの日は、ミルが外の世界に出て間もない頃だったわけですね。内には壮大な計画を秘め、頼りにできるのは歴史家だけで、その歴史家に裏切られ……」

ミルは俯いていた。

「変な人ですね。話を信じたわけではないと言っておきながら、そんなことを言って」

「謝りはしません」

「ええ。あなたは正しい。あなたは、あなたが守るべきものを守っただけだから」

シルリーは、ミルに「正しい」と言われてどこかほっとしている自分がある事実から目をそらした。

「もうひとつ、いいですか」

シルリーは尋ねる。

「ええ」

「フオードは『期間』について独自の研究を行っていると申しましたね。ミル自身は実際どこまで知っているんですか」

「……ああ。それについてはほとんど知らないです。あれも、わたしの心細さを強調したかっただけ。こう言つのもなんですがね」

「そうですか」

シルリーが応えると、ミルは立ち上がった。

「もうわたしに訊くことはありませんか」

「ええ、一応は」

「なら、帰りましょう」

「え？ 俺をここに呼びつけたのはミルじゃないですか」

「わたしの用件は、もう済みました。わたしはここで着替えるので先に帰っててください」

言われるままにシルリーは部屋を出た。

シルリーたちが会議室でしばらく待つと、二人ほどの部下を連れてミルが現れた。再び豪華な王族の服を着て。出された食事も終えたシルリーたちはしばし歓談していたが、ミルの登場と共に切迫した表情を浮かべた。

「お待たせしました。では、そろそろ本題に入ることに致しましょう」

ミルも席に着いた。

「わたくしは平和を望みます」

ミルの声は、シルリーと先ほど話していた時とは別人のようだった。この切り替えの早さにシルリーは相変わらず驚かされた。

「しかし、世論がそれを許さないでしょう。民はわたくしに言います。南を制圧しろ、統一戦争だ、と」

そうなるように仕向けたのは、他ならぬミル。リラ自身ではないか。南側の全員がそう思ったが口には出さなかった。

「南二一口の皆さま、南北は互いに関わりあわねば存続が難しいと

いうことは、ご理解頂けているかと思えます。すなわち、このまま互いに知らぬ存ぜぬというわけには参りません。戦争か、外交を始めるか、このどちらかしかありません」

これはここにいる者全員の共通認識だった。その前提で、この会談は開かれている。

「外交は行いましょう」

ミルは続けた。

「ただわたくしたちはあなた方への敵対的な姿勢を崩すわけには参りません。……それはあなた方にとっても同じことだと思います」
ミルとしても、戦争は避けたいというのが本心なのだろう。しかし対立感情を煽って王となった手前、今更南側と協調することはできない。

「冷戦という言葉をご存知ですか」

ぽつんと、ミルは話の流れを切るように尋ねた。

「いえ」

「かつてあった大きな戦争の後の、武力衝突を生じない対立構造のことです。主には経済に対するイデオロギーの衝突、形としては兵器の開発競争、外交面などに現れました」

シルリーを含め、そこにいる者全員がミルの言葉を理解できていなかった。そもそもミルの言う「大きな戦争」というのが何の戦争を指すのか見当がつかない。歴史家であるシルリーが分からないのだから、本当にあった戦争なのかどうかすら怪しい。そして、武力衝突を生じない対立構造というのが、シルリーたちにはどうもイメージしにくかった。

——もしかすると、「元の世界」での出来事なのだろうか。

シルリーは先ほどの会話を思い出し、少しそんなことを考えたが、すぐに現実的ではないと思いかき消した。

「恐らくこれから、そういった状況になっていくと思います」

ミルの声にも、何か覚悟を決めたような緊張感があつた。

結局、この会談で以下のことが今後の方針として定まった。

・南北二一口間での通商・物資の行き来は最低限これを認める。
・南北二一口はセマーヌ川を境とし、原則的に人の往来には許可を要する。

「納得いかない」

帰りの馬車の中、ロールロットが言った。オルケが警戒するようにロールロットを睨みつけた。

「何がだ」

シルリー自身は目を前方にやっただけで何も言えなかった。

「どうして戦争に打って出ないの」

「無駄な被害は出たくない。女王も戦争は望まれていない」

「女王って……。あなた、もともとはミルリラの部下だったんでしょう？ さつき二人で何を話していたの？ 本当は北と繋がっているんじゃないの？」

「ロールロット」

シルリーが低い声で呟くと同時に、オルケの刃がロールロットの喉に当てられていた。

「それ以上勝手なことを喋ったら、殺す」

シルリーはロールロットの眼をまともに見て言った。

ロールロットは唇を噛み、シルリーを敵対の眼差しで見たが、何も言わなかった。

「……まあ、俺とてこの膠着状態を続けていくつもりはない。じきに行動に出るさ」

シルリーの言葉に対して、ロールロットは「どんな」とは訊かなかった。

馬車はセマーヌ川を越えた。

第十一話 「狭い世界に」

五八八年の春。フォード・ダングルはニール東部の森を散歩していた。通常、市長たる人間が訪れる場所ではない。フォードには目的があつた。フォードは政治家だったが、学問や技術の開発などにも熱心で、それぞれ自分直属の研究機関を設けていた。最近フォードが特に興味を持っているのが「期間」の研究である。稀に、全ての人々が一定期間の記憶をなくすことがある、そんな噂が街で囁かれていたが、フォードはその話に信憑性があると思つていた。そして、「期間」の訪れは、神話にある「世界の分化」と関係しているのではないかという仮説に至つた。つまり、この世界がもつと大きい世界から分化したときのショックは大きく、その余波が未だに一定の周期で訪れ、そのとき人々は記憶を失つ、と。そして、研究機関の出した数値によると、近いうちに「期間」が訪れてもおかしくないという。ならばこの世界にも何らかの兆候が現れるのでは、と思ひ、このように「ニールの果て」と呼ばれる場所を歩きまわっているわけだ。

「市長」

護衛の人間が大慌てで走ってきた。

「どうした」

「人が、倒れています」

護衛の報告を聞き、フォードは案内されるままに足を運んだ。五分ほど歩いた後、草むらに一人の少女が倒れているのを見つけた。容貌は十歳から十三歳ほどと見え、ぼろきれのような服を身にまとつており、肩などいたるところに傷がある。明らかに平穏な事態ではなかつた。

「人を呼べ。わたしの家に運ばせる」

ニールにも病院はあるが、ここからは遠い。それよりはある程度の医療設備が整っているフォードの自宅に運んだ方が早かつた。

すぐに数人の部下が担架を持って駆けつけ、少女を運んでいった。フォードは一通り指示を出した後、自らも歩いて自宅へと戻った。フォードはすぐに少女の容体を訊いた。医師によると軽度の外傷を負い、疲労の為意識を失っているが、命に別状はないとのことだった。フォードは少女を医務室で休ませることにした。

フォードが医師から少女の意識が戻ったと聞いたのはそれから数時間してからのことだった。フォードはすぐに医務室に向かった。

「気が付いたか。わたしの言葉が分かるか？」

フォードが話しかけると、少女はしばらく困惑したような表情を見せたが、やがてたどたどしい口調で応えた。

「わか、る」

それは言葉にこそ聞こえたが、随分訛りが強く、フォードは聞きとるのに苦労した。

「何故あんなところに倒れていたか思い出せるか？」

フォードの問いにまたしても少女はしばらく考え込むような様子を見せた。もしかすると、少女もフォードの言葉を聞きとるのに苦労しているのかもしれない。

「パパ、ママ、お兄ちゃん、妹、皆、死んだ。鉄砲や爆弾、襲ってきた。わたし、逃げた。いっぱい痛い思いして、逃げた。疲れて、ふらふらっとして、気付いたら、ここに寝てた」

少女の言うことがフォードにはなかなか理解できなかった。最近の二ー口で鉄砲や爆弾を使うような戦闘は起きていないはずなのだ。

この時点でフォードはある予感を胸に秘めていた。

「少女よ、お前の住む世界は広がったか？」

少女は頷いた。

「海の方こうに、他の『国』があつたか？ 自分たちとは違う言葉を話す人々がいたか？ 自分たちとは違う肌の色をした人々がいたか？」

少女は頷いた。それと同時に眼には涙をにじませ、やがて大声を

上げると叫んで暴れだした。フォードは急いで少女の肩を掴み、落ち着かせた。

「暴れてはいけない。まだ身体が快復していない。怖い思いをしたのだろ。今は休むといい。ここにはお前に乱暴をするような者はいない。安心していい」

フォードの言葉に少女はだんだんと鎮まり、やがて疲れたのか再び瞼を閉じた。

フォードは医務室を出ると、医師に言った。

「あれは、別の世界から来た人間かもしれない」

市長たる人間が発するにはあまりに荒唐無稽な言葉。しかしこの医師も共に「その」研究を進めてきた。

「『期間』の開始の兆候として、二つの世界の間の距離が縮まっていると？」

「そうだ」

「しかし、我々の言葉が通じたというのは妙ですね」

「恐らく、ニーロはあの少女の住んでいた『国』から分化したのだろ。なんとなく意味は分かるが、やはり我々の話す言葉とは違うところがあった」

フォードの中で、今まで漠然とあった構想が形となり始めていた。「あの少女、わたしが養うことにしよう。本当にあちらの世界から来たのなら、身寄りもあるまい。そして彼女に最高の教育を」

こうして少女はフォード「ダングル」に養われることになった。

それから数日経ったある日、フォードは少女を呼び出した。フォードの傍らにはメイドの女が立っていた。エル「オー」といい、歳は十九、髪は肩にかからない程度に切り揃えられており、眼鏡が特徴的だった。

「今日からこのエル「オー」をお前の世話役としてつけることになった」

フォードが言うと、エルは少女の前に歩み出た。

「本日より、お世話をさせて頂きますエルと申します。宜しく願います。恐縮ですが、お名前を教えて頂けますか」

エルの言葉に、ミルは少したじろいだような表情を見せたが、やがて答えた。

「ミル……リラ……」

「ミル様ですね。あなたのこれから暮らす部屋が決まりましたので、ご案内させて頂きます。どうぞわたしの後に」

エルが歩きだすと、ミルもその後をついていった。

「あの……」

ミルはエルの顔色を窺うような声を出した。

「何でしょう」

エルは振り返らずに応える。

「なんだか、お姫様みたいにしてくれるんだね。わたし、こんなにきたないのに」

「汚くなどありませんよ。あなたは気品に満ちたお方です」

ミルはすぐに黙ってしまった。

しばらく歩いて、ミルがこれから使うという部屋の前まで来た。

「家の中なのに、すごくたくさん歩いた」

ミルがそんなことを言うとエルは微笑んだ。部屋の扉を開ける。目に飛び込んできた光景に、ミルは思わず声をあげてしまった。

絨爛な絨毯。ミルの身体の何倍もあるベッド。華やかな装飾の施された化粧台。何着入るのか見当もつかない衣装棚。

「これ、わたしの部屋？」

「そうですよ」

「わたしのすんでた家よりおおきいよ」

ミルは怯えたかのような表情を浮かべた。

「大丈夫ですよ。さ、中へ」

エルはミルの手を取って部屋の中に入った。

「どうぞ、楽になさってください」

エルがそう言うと、ミルはひとしきり辺りを見回した後、絨毯の

上に座り込んだ。それを見たエルは思わず笑ってしまった。

「失礼します」

エルはミルの身体を抱き上げると、ベッドの上まで運んだ。

「寝転がるなり、腰掛けるなり、お好きにどうぞ」

「こんな高そうな布、よごしちゃうよ」

「大丈夫ですつてば」

ミルはしばらくそわそわしていたが、やがてベッドに腰掛けると
いう形に落ち着いた。

「あの人は、だれ」

ミルはやがてそう呟いた。

「フォード様ですか？ あの方は、この二ー口の街を治める市長で
す」

「市長……。じゃあ、偉いんだ」

「ええ、この街で一番」

そこで会話は途絶えた。エルはミルの傍らに立って、次の指示を
待っていた。

そうしていると、やがてミルが痺れを切らしたように言った。

「ああ、もう落ち着かないなあ！ 立ってないで座つてよ」

「よろしいのですか？」

「わたしがそうしてほしいの！ 命令」

「では、失礼して」

エルもベッドに腰掛けた。

「フォード……さまが、言つてた。ここはわたしの住んでた世界と
は違つて」

「そうみたいです」

「うん。たぶん、そうなんだと思う」

「寂しいですか？」

「ううん。仲のいい人は皆死んじゃったし、怖いことがないから、
ここのほうがいい」

「ええ。二ー口はいいところですよ」

会話は再び沈黙を挟む。

「エルは何でわたしの手下みたいにするの？ 大人のくせに」

「手下って……。フォード様があなたのお世話をするようおっしゃったからですよ」

「それと手下みたいにするのは関係ないと思う」

「言葉遣いのことをおっしゃっているのですか？ それなら、申し訳ありませんが変えることができません」

「なんで」

「ご主人様に失礼な口の聞き方をするのは、わたしの信条に反しますから」

「意味わかんない」

ミルは不満そうに唇を尖らせた。

ミルがフォードの家にやってきて数週間が過ぎた。

その日はもう月が高く昇り、ミルも就寝準備を始めていた。部屋には話し相手としてエルがいた。

「だいぶ、こちらの言葉遣いに慣れたみたいです」

エルは突っ立っている。既にベッドに入っているミルが手招きをする、エルはベッドに腰掛けた。もうずっとこうしているのだが、エルは決して自分からはくだけた態度を取らなかった。

「まあ、もともとわたしたちの言葉にあまり大きな違いはなかったみたいだしね」

「言葉遣いも綺麗になられて素敵ですよ」

「……フォード様は、いい人だってことは分かるんだけど、少し怖い」

「真面目な方ですから、そう感じられるのかもしれませんが」

「結局、わたしは当分外に出られないのかな」

「お気の毒ですが、そのようです」

ミルはこの家に来てから、一度も外に出たことがなかった。家自体がかなりの広さを持っているのであまり窮屈な気はしなかったが、

市長たる人間が身寄りのない少女を個人的に養っているというのが、あまり世間に知られたくはない事実だと、幼いミルにもなんとなく分かっていた。

「辛いですか？」

エルの問に、ミルは首を横に振った。

「こないいいところに住めて、毎日ご飯も食べられて、すごく幸せ」「ミル様」

「何？」

「わたしが、外のことを話して差し上げましょうか。その日その日の二ー口を」

エルはミルの顔色を窺っているようだった。

「じゃあ、わたしはエルにふるさとのことを話してあげる」

ミルの笑顔を見ると、エルも安心した表情を浮かべた。

外に出られないとはいえ、ミルの毎日は決して退屈なものではなかった。

「読んでおけ」

フォードが机の上にミルの拳ほどの厚さの本を置いた。ミルはしばらく瞬きをしてそれを見つめていた。黒地に金で「歴史」と書いてある質素な表紙。

「これ全部、ですか」

「そうだ」

「無理ですよ、こんなの」

ミルは足をばたばたさせて言った。

「この街に来て間もないお前には、この街の歴史を知る必要がある。それにその程度で根をあげてはいけけない。それを書いたのはお前とあまり歳の変わらない少年だ」

「わたしと同じくらい？」

「そう、次の歴史家の、シルリーという少年が就任前の挨拶という形で出版したものだ。まあお前にはそのくらいが丁度よかるう」

「なんか馬鹿にされてる気がします！ それに、歴史家って何ですか」

「それも、読めばわかる」

フォードは部屋を出ていってしまった。

「ひどいと思わない？」

ミルは机に突っ伏してエルに言った。

「まあ、読んでみたら案外面白いかもしれませんよ。それに、やっぱりこの街の歴史を知るのは大事なことですし。それより、ミル様はこちらの文字は読めるのですか？」

「うん。これもわたしのふるさととあまり変わらないね」

言つとミルは溜息をついた。

「フォード様はわたしをどうしたいんだろう」

「立派な淑女に育つてほしいのでしょう」

ミルは不満を言いつつも本を開いた。

本を読み始めて数十分立った後、ミルはエルに尋ねた。

「歴史家は市長の部下だって書いてあるけど、今の歴史家もフォード様の部下なの？」

「ええ。サイ＝コランデュー様が現在の歴史家にして、フォード様の仕事上のパートナーです。その歴史書を書いたシルリー＝コランデュー様はそのご子息です」

「わたしとあまり歳が変わらないんでしょう？　すごいね」

「それはもう、大変優秀な方ですよ」

「エルは、この人のことを知ってるの？」

「以前に一度、この家にいらっしゃったことがあります。それに、フォード様からお話はよく伺っています。歴史家というのは政治と學術の両方の世界にとつてのトップですから、相応の教育を受けてきています。シルリー様も同年代の子どもとは比べようもないほどの教養をお持ちです」

「わたしも会えるかな」

「サイ様が引退されれば、次の歴史家はシルリー様ですから、フォ

ード様とも毎日会われるでしょう。そのときは、きっとミル様の目ににかかることもあるでしょうね」

「なんだか王子様みたいだね」

ミルは夢見がちな瞳で言った。

「シルリー様は歴史を知らない女性など相手にされないかも知れませんが」

「そ、そうだね。よし、勉強しなきゃ」

ミルは再び本を読み始め、エルはその様子を笑顔で見守っていた。

その晩も、ミルはエルの口からその日二ー口であった出来事を一通り聞いていた。

「いい街なんだね」

ミルはぽつんと言った。

「ええ、それはとても」

「フォード様のおかげ、ってことなのかな」

「そうですね。この街も数十年前までは戦争で荒廃していて、わたしも、フォード様が市長になられてからかなり住みよい街になったな、と子ども心に思ったことを憶えています。わたしは、もちろんお給料を頂いてここに勤めさせて頂いているわけですけど、そういった仕事抜きでもフォード様のことは心から尊敬しています」

「わたしは……申し訳ないけどまだ少し苦手かな……。勉強しろって言うてるし。エルは、わたしの世話をしてくれるのも、お給料をもらっているからなの？」

「もちろんそうですけど、個人的にもミル様のことは大好きですよ。こういうことを恥ずかしげもなく言われるとミルの方が俯いてしまふ。」

「あのさ、お礼にわたしのふるさとのこと話してあげるって言ったけど、まだ話してなかったじゃない」

「そついえばそうですね」

「話してあげる。まずね、すごいよ、世界中のニュースが映る箱が

あるの」

「そんな魔法みたいな」

「本当だよ。他にも、遠くの人と会話ができる器械とか、空を飛ぶ乗り物とか。わたしのパパは科学者だったんだ。だからそういうのもすごく詳しくて……」

エルは、話していくうちにミルの表情が暗くなっていくことに気付いたが、何も言わなかった。

「ほら、わたしって別の世界から来たわけでしょ。これって信じられないことだと思うんだけど、フォード様やエルはすんなり受け容れてくれたよね。どうして？」

「フォード様が日頃からそうだった研究をされていて、慣れていたんですよ」

「そうだよ。わたし自身も世界を越えちゃったわけだけど、その現実を結構すぐに受け容れたと思わない？ それはね、わたしのパパもそういう研究をしていて、普段から話を聞かされていたからなんだよ。パパは絶対にもう一つの世界を見つけるってはりきって」

ミルは首を左右に振り、笑顔を作った。

「寂しくはないよ。フォード様も、エルも、ここにいるから」

そんなミルの表情を見て、エルは少し不安になった。

「わたしも、ここにいるよね。夢じゃないよね」

「ええ」

夜は更けていった。

第十二話 「狭い世界で」

その朝、ミルはいつもより早く目が覚めた。壁掛け時計を見るとまだ午前五時だ。まだ鐘楼の鐘も鳴っていない。既に夏は終わりで、この時間帯はベッドの外に出るのが億劫だ。かといって二度寝する気も起きない。ミルは何をするでもなく、目を開けていた。

本当に静かで、時計の針の音と自分の呼吸の音しか聞こえない。そんな中、自分の部屋の前を通り過ぎていく足音はやけにはつきりと聞こえた。ミルは思わずベッドから出て、扉を少し開いて外の廊下の様子を見た。顔を左に向けると、フォードの後ろ姿が見えた。この早朝に、外出用の服を着て歩いている。不思議に思ったミルは、少し遅れてフォードの後をつけていった。

フォードは庭に出るようだった。ミルに外出は許可されていないが、庭に出るくらいなら自由にしていることになっている。ミルは更に後を追った。

フォード邸の庭は広く、それだけで一つの公園のようにも見える。一面に芝が生えており、木も多く、いたるところで朝露が光っている。

フォードは庭の片隅で立ち止まると、しゃがみ込んで、祈りを捧げるような姿勢をとった。その姿はどこか普段のフォードとは違って、厳格で偉大な指導者というよりは、清廉な僧侶のような透明感を持っていた。

「何をしている」

不意にフォードが、こちらを見もせずと言った。ミルは内心かなり驚いたが、表情は変えずにフォードの前まで歩いていった。

「フォード様こそ、何をしていますか。こんな朝早くに」

ミルの問いに、フォードは立ちあがってミルの顔を見た。その眼にはミルがいつも見ているのとは違う優しさが表れていた。

「亡くなった妻に祈りを捧げていた」

ミルは大きく目を開いた。

「この方向、はるか向こうに彼女の墓標が立っているのだ。さすがに毎日あちらに赴くわけにもいかなくてな。わたしの出世を快く思わない政敵に、家に火を放たれ殺された。わたしだけが生き延びた。わたしも、お前と同じだ。幼い頃に戦争で家族を全て亡くし、今でも独りだ」

ミルは何か喉の奥から言葉が出てきそうになったが、上手くそれを発せなかった。フォードは自分が思っていたのよりもずっと純粋で優しい人間だった気がして、それでいて普段見せる厳しい表情の理由が分からなくて、とにかく混乱していた。

「フォード様は」

ミルは胸の中の空気をほとんど吐き出して言った。

「どうしてわたしの面倒を見てくれるんですか」

それを聞いたフォードの表情は、再び政治家の仮面をつけたように見えた。

「さすがに気付いたか」

「え？」

「わたしとて、慈善のつもりでお前を養っているのではない。目的はある。一つはお前からお前の暮らしていた世界についての情報を得ること。もう一つは、お前にわたしの後を継がせること」

「フォード様の後を……？」

「シナリオは既に出来ている。お前は二ー口の市長、ゆくゆくは女王となりこの街に永遠の平和をもたらすのだ」

「言っていることが分かりません。わたしが？ 女王？ そんなの無理です。わたしはまだこの街を歩いたこともないのに」

「必要なことは全て教えるし、最初の数年はわたしの言う通りに動いていればいい。それに、お前は優秀だ。広い世界を知っているお前にとってこの世界を治めることなど、容易いだろう」

フォードはそう言っミルのもとから去った。ミルはまだ言い足りないことがあったが追いはしなかった。

五八九年、四月。

ミルのもとに一つの知らせが届いた。フォードの右腕として働いてきた歴史家のサイ「コランデュー」が引退し、息子のシルリー「コランデュー」が次の歴史家になったという。

「恐らくは、奴がお前のパートナーとなるだろう」

食卓でフォードは言った。

「奴は歳もお前とあまり変わらない。まだ十五だという。しかし優秀だ。やがては父親を超えるだろう。部下に関しては、お前は心配しなくていい」

あれ以来、すっかりミルが市長になることで話は進んでいた。ミルについた教師は皆二口でトップクラスの学者らしく、誰もがミルのことを神童だと絶賛したが、この世界で自分と同年代の子どもと会ったことのないミルにとっては実感がわかなかった。

「シルリー」コランデューと会うのは、楽しみではありません」

それは純粋に自分と年の近い人間に会うことへの期待でもあったし、シルリーの著した歴史書を読んだときからの憧れでもあった。

「しかし、優秀すぎるがゆえに、疎まれることもある」

フォードは独り言のように呟いた。

「フォード様は、どうしてこの街の平和を願うのですか」

ミルはふと思ったことを尋ねた。フォードの望みは壮大だ。しかしフォードの覚悟相応の理由をミルはまだ聞いていなかった。

「話したと思ったが」

「え？」

「わたしが幼いころ戦争に巻き込まれたことも、政局の争いの中で妻を失ったことも、言っただろう。もうあんな思いはしたくないし、大切な人も失いたくない。これは個人的な夢なのだ。『街の為』などと言うが、最初の動機などそんなものだ」

フォードは淡々と説明した。

フォードは次第に自身の秘めた計画を明かしていった。フォードは次の市長としてミルを指名する。市長となったミルは、平和のための再構築と称して市長に対抗しうる勢力の排除を行う。それに対してまず間違いなく軍部は反抗するだろうから、市庁側もその宣戦を受け取る。この時点で南北対立の構図が出来上がる。ミルは北部市民の南部への対立感情を利用して自らの権力を確固たるものにし、女王として即位する。南部を併合して二ー口統一を達成した後も中央集権を進め、女王のもとで全ての市民は平等であるとする。

「指導者さえ優秀ならば、独裁とは理想的な統治形態なのだ」
フォードは自らの構想に関して、そう理論づけをした。

初めは消極的だったミルも、次第に自信をつけ、次期市長としての覚悟を決めるようになった。自分は間違いなく優秀であり、人の上に立つ資質を持っている。ただ一つ不安だったのは、ミルが本当の二ー口を知らないこと。ミルが住むのは狭い世界の中の狭い世界。知り合いといえば、フォードと、エルと、何人かの教師だけ。それでも、自分を絶望の淵から救い出して、立派に育て上げてくれたこの世界に、数少ない友人たちに、何らかの形で恩返しをしたいと思っていた。いつときは戦争という手段を用いる、いびつな恩返しだった。

五九三年、十二月三十一日。

「お似合いですよ」

エルはミルに服を着せていた。普段着ている服とは違う、市長として着る服を。緑色の絹のドレス。いつもにもましてそれは優美だった。

「そう？ 変じゃないかな」

ミルは鏡があるのにも関わらず、直接自分の体を見まわした。

「明日はいよいよミル様が外の世界に出てゆかれる日なのですから、きっちり決めていきましょう」

エルの言葉に、ミルは純粋な笑みを浮かべた。

ミルはテラスに出、エルもそれに続いた。日は既に沈み、空からは光を帯びた葉が時折降ってくる。大晦日の祭りに際して、フォードが鐘楼から撒いているのだ。ミルは屈んでその中の一枚を拾った。「来年は、わたしの役目なんだね、これ」

「ええ。この祭りにもいよいよ参加できます。それも、主役として」ミルの瞳は期待で輝いていたが、一抹の不安がそれを濁らせていた。

「必要な勉強は全てした。学者さんたちもわたしを優秀だと言ってくれた。フォード様も大丈夫だって言っている」

ミルは自らに言い聞かすように言った。

「エル、大丈夫だよ」

ミルは両手でエルの右手を覆った。エルは微笑むと、その手を握り返した。

「きつと」

「今までありがとうね。エル、あなたは仕事としてわたしの相手をしている使用人だって言っていたけど、友だち、と呼んじゃ駄目かな」

「どうしてそんなことをおっしゃるんですか。恐れ多くも申し上げますが、ずっとミル様のこと、実の妹のようにお慕いしておりますよ」

ミルも笑った。

五九四年、一月一日。

「今日からお前に外出を許可しよう。まずはシルリーとの面会がある。午後三時に市庁舎セレモニーホールだ。案内はエルがしてくれるだろう」

「はい」

ミルは市庁に出勤するフォードを送り出していた。フォードは靴を履き、鞆を持ち、既に扉の前に立っていた。

「ミル、お前はわたしを恨むか？」

不意にフォードは動きを止めて尋ねた。

「わたしに拾われたばかりに、今日という日まで全く外に出ることが出来なかった。それどころか、わたしはお前にこの上なく重い責務を負わせようとしている。わたしはお前の自由を奪った」

それを聞くと、ミルは落ち着いた笑みを浮かべた。

「フォード様ともあるうお方が、何をおっしゃいますか。わたしを拾ってくださり、外の世界で生きていくのに必要な力までお授けになった。感謝することこそあれ、恨むなど滅相もございません」

「……立派になったな。これならば外に出しても心配ない」

フォードはそう言って扉を開けた。

「ミル」

フォードは最後にもう一度だけ立ち止まった。

「わたしのやり方が気に入らないなら、反旗を翻すがよい。お前にその力があるのなら。もう、お前は自由だ」

フォードは家を出ていった。

一月三日、夜。

ミルは鐘楼の上に立っていた。傍らに居るのは歴史家にして自分のパートナー、シルリー・コランデュー。長い階段にすっかり息は上がってしまい、冷たい風がミルの肌を切り裂くように吹いた。

その時、ミルは初めて二ー口の街を見た。

世界があつた。

近くには商店街の賑やかな明かりが。その少し奥に、美しい市庁舎が。振り返ると静かな住宅街が。その向こうに川が。その向こうに南部の森が。西には日の沈む海が。

全ての人々が暮らしている、世界があつた。

「わたしは、この風景を背負っていくことになる」

ミルは自分に向かって呟いた。

「シルリー。わたしに、教えてくれますか。この鮮やかな街の、色々なことを」

「喜んで」

その返事は、シルリー「コランデューは、ミルが外の世界で見つけた、最初の希望だった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2277s/>

狭い世界で、君は憶えていない

2011年10月22日21時17分発行